



ダークFT
シャイニング グローリー

Shining Glory



Shining Glory

◆登場人物◆



・ハルシオン (20)

アルピヨン国 銀光騎士団の騎士長。
白金(プラチナ)の髪。
翡翠(かわせみ)色の瞳。

吸血鬼を一撃で葬り去る
『輝ける栄光』という名の銃を操る。
年齢の割に、落ち着いている。



・アナーシア (17)

アルピヨン国の姫。
蜂蜜色の髪。
青灰色の瞳。

負けず嫌いでいつもぶりぶりしているが
仕草や考え方は女の子らしい所もある。

【1】 闇夜の銀光

例え街の中でも、日が落ちてからは外を出歩くものではない。

アルビヨンの住人なら、それは生まれてから一番最初に親に教え込まれる。

その理由を知っているから、石畳を歩く自分の足音さえ内心驚いてしまいそう。

アナーシアは不安を感じる自分を鼓舞するように、腰の剣帯に吊るした銀の細剣（レイピア）の柄をぐっと右手で握り締めた。

大丈夫。

私だってやれるわ。

「アナーシア様、やはり戻りましょうよ」

アナーシアの後から小走りに走る従者の少年が、おずおずと声をかける。

だがアナーシアは完全に彼の存在を無視していた。

（エルム、引き止めても無駄よ。今夜は私も夜警をするって決めたんだから）

きっと顔を上げたアナーシアの背中で、結い上げた蜂蜜色の長い髪が馬の尻尾のように勇ましく揺れた。

アナーシアは首筋にまわりつくそれを、手袋をはめた手で払いのけた。

ふっと、脳裏に昼間の出来事が過ぎった。

『私はアナーシア様のその髪型、嫌いではありません。お元気なあなたらしく、馬の尻尾みたいで』

アナーシアはざりと唇を噛み締め、ついでに拳も握り締めた。

馬の尻尾……。馬の尻尾だなんて。

「もう！ 何よ！ 馬の尻尾って！ そこはせめて鬘（たてがみ）って言って！」

「アナーシア様っ」

「何！ さっきからうるさいわよ、エルム」

アナーシアは拝借してきた銀光騎士団の白い外套を翻しながら振り返った。

拝借してきたのは実は外套だけではない。肩の所で膨らませた独特の形の制服もエルムに頼んで持ってきてもらった。

アナーシアは十七歳のうら若き乙女だ。

まさかドレス姿で剣を腰に差して、夜な夜な人々を襲う『吸血鬼』が出る夜の街を歩くわけにはいかない。

いや、アナーシアがドレスを着ることは普段滅多になく、このアルビヨンの女王である母は、それを密かに嘆いていた

。

「姫様、こんなこと……やめて下さい。女王陛下に怒られるし、吸血鬼は人間と見分けがつかないっていうじゃないですか。だから、銀光騎士団が毎晩夜警にあたってらるんですよ！」

明るい茶色の髪をした従者のエルムは、アナーシアと同年だった。

身長はアナーシアより高く教養があり黙って立っていれば見栄えもする少年だが、腕っぷしも剣の腕も実はアナーシアの方が上だった。

今夜、黙って城を抜け出して夜警に出ようとした時、エルムは従者としての義務、ただそれのみでアナーシアについてきた。

本当は怖くて怖くてたまらないだろうに。

忠義心だけは認めるが、彼の説得に応じて城に帰るつもりは毛頭ない。

アナーシアは首に絡まる毛先が少しカールした蜂蜜色の髪を手で払った。

「そんなのわかってるわ。でも私は、毎晩アルビヨンの住人達が、あの憎き吸血鬼の餌食になっていることを、黙ってみられないの。怖いなら先に城へ帰りなさい、エルム」

アナーシアは自分で言ったその言葉に、改めて、夜警を成し遂げるという強い意志を込めた。

そう。

アルビヨンは七百年という遙か昔から、吸血鬼と戦っている国だった。

吸血鬼。

人間と寸分違わぬ姿を持ちながら、その中身は人の血を求め、夜を徘徊する――魔物。

彼らがどこからきて、何故、アルピヨンの住人を襲うのか。

ただ彼らは人間が食物を得るため動物を狩るように人間を狩る。

生きるために人の血が必要なものであることはわかっているが、だからといってこのまま好きにさせる気はない。

冗談じゃないわ。

そうやすやすと、餌食になってたまるもんですか。

アナーシアは背後からついてくるエルムの気配に苛立ちながら、夜風に乗って聞こえた人の悲鳴にその場で立ち止まった。

いや、足が一瞬すくんでしまった。それは否定しない。

「ひ、姫」

自分が聞いた悲鳴はエルムの耳にも聞こえたのだろう。

頭上で光る青白い月光のように、顔色を一気に青ざめさせて、彼は後方の路地の暗い一角を見つめている。

どくん、と心臓の鼓動が急に跳ねた。

アナーシアは右手を銀の細剣の柄に沿え、それを静かに引き抜いた。

アルピヨンの街には夜を徘徊する吸血鬼を避けるため、暗闇を避けるために道端にはいつも松明の灯が掲げられている

。

それが赤々と燃え盛る路地から少し外れた奥で――。

再び男のものと思しき掠れた悲鳴が聞こえた。

袋小路となった石積みの壁に背中を預け、黒い神官服を纏った銀髪の男が、長い赤髪の女性――恐らく着ている派手な服装からして娼婦だ――に追い詰められているのが見える。

女はひどく興奮しているらしく、甲高い奇声を上げながら、ぼさぼさに伸びた髪を振り乱し、右手を銀髪の男に向かって突き出した。

「うわっ！」

女は男の頭を掴んだ。そのまま壁へとぶつけるように押し付ける。

鈍い音を立てて男のこめかみが壁へと押し付けられる。

その体勢から覆い被さるように、女が自分の体を男へ寄せ、首筋へ噛み付こうと口を開ける。

犬歯がみるみる長く鋭く伸びていくのが見える。

「やめなさい！」

アナーシアは駆けていた。

背後から女の右肩へ銀の細剣を突き刺すと、女は男の頭から手を離し、首を後方へ回してアナーシアを見た。

月光の光に映る女の目は紅に染まっていた。獲物を前にして、それを邪魔された悔しさを表すかのように、ぎらぎらと凶悪な光を発していた。

アナーシアは今までに感じたことのない、例えようのない『恐れ』を抱いた。

暫し女の赤く狂気に満ちた瞳と獣のように伸びた犬歯を見て言葉を失った。

これが吸血鬼なの？

初めて見た人間とは違う異質の生き物。吐き気を伴うおぞましが胸まで込み上げ、恐怖が体中を冷水のように駆け巡る。

その時、細剣を握る腕が信じられない力で引っ張られた。

女が右腕を振り回すようにして身をよじったのだ。そのせいでアナーシアの刺した細剣も一緒に捻れ、銀で覆った先端部分があっけなくぼきりと折れた。

「！」

「があああ……ぐう……！」

女は苦悶の声を上げながらも、今度は標的をアナーシアに定め襲い掛かってきた。

剣が折れた事に一瞬戸惑い立ち尽くすアナーシアの反応は遅れた。気付くと、飛び掛ってきた女に押し倒されていた。
「くうっ！」

石畳に後頭部を打ちつけ、じわりと広がる鈍痛に、アナーシアの口から息が漏れる。

アナーシアが刺した女の右肩は、酸でもかけたように傷口が激しく泡立ちうっすらと白い煙が上がっていた。

吸血鬼にとって銀は猛毒だ。致死量が体内に入れば、そこが熱を運びやがて青白い炎を上げて燃え出し、灰となって消滅する。

「ア、アナーシア様っ！」

エルムが短剣を抜いて吸血鬼の女の腰へ体当たりをするようにそれを突き刺した。

だが女は右手を振り上げ、あっさりとエルムを殴り倒した。

「ぐわっ！」

エルムの体が数メートル後方の路地へとふっ飛ぶ。

路地に置かれていた樽が砕ける音がした。

「エ、エルムっ！」

アナーシアは吸血鬼の女の手から逃れようと、覆い被さるその体へ、腹へ、足をばたつかせて蹴りつけた。

だが女は痛みを感じないのか、寧ろアナーシアの両肩を抑える手に更に力を込めて、その白き首筋に浮き立つ血管を求めてじわじわと顔を寄せる。

獣のようなごわついた女の髪と荒く生暖かいねっとりとした息が顔にかかる。

「い、嫌っ……！」

アナーシアは迫る吸血鬼の顔から顔を逸らせ目を閉じた。

脳裏に白金（プラチナ）の長髪を首元で束ねた、一人の騎士の姿が過ぎった。

『ハルシオン——』

その時アナーシアは息を詰めて目を見開いた。

覆いかぶさる女の肩越しに、一筋の白銀の光が弾丸のように飛翔するのが見えた。

それはアナーシアの上に覆い被さっていた女の背中へと吸い込まれる様に命中した。

「ぎゃああああっ！」

およそ人のものとは思えない絶叫を上げて女が仰け反る。

もう一度。

闇夜を切り裂く白銀の閃光が、今度は女の頭を射抜くと同時に体も後方へと吹き飛ばす。

「……」

石畳の上で倒れているアナーシアは、今まで自分に覆いかぶさっていた女の吸血鬼の体が青白い炎に包まれたかと思うと、白い灰となって暗い夜空に舞って行くのを見ていた。

これが吸血鬼の最期だった。

——カツ、カツ。

石畳の上を歩く長靴の音が響く。

アナーシアは痛む後頭部を気にしながら、そっと足音の聞こえる方へ首を左へ回らした。

白い外套を纏った背の高い人間が一人、こちらへと近づいてくる。

首の後ろで一つに纏めた月光に輝く白金（プラチナ）の長い髪を靡かせながら、肩の所にふくらみを持たせた独特の形の騎士服——銀光騎士団の制服を纏っている。

その見覚えのある姿を見て、アナーシアは全身から力が抜けるのを感じた。

「お怪我は？」

相変わらず落ち着いた、けれど確かに自分の身を案じる声。

アナーシアは伸ばされた騎士の手を掴んだ。内心は嬉しかったのだが、おくびにも出さずそれに渋々すがって上半身を起こす。

片膝を付く騎士の翡翠（かわせみ）色の瞳が、アナーシアの顔をいつになく不機嫌そうな表情で覗きこんでいる。

「……ないわ」

「それなら結構です」

吸血鬼の女を屠った銀光騎士団の青年は、薄い唇を満足げに動かしやんわりと微笑した。

それをアナーシアは一瞬眩しげに見つめた。

彼の右手には十字架を模したような形の白銀の銃がまだ握られていたからだ。

それこそが、吸血鬼を唯一一撃で葬ることができる武器。吸血鬼と戦う『銀光騎士団』の騎士長である証。

七百年前に一度アルビオンから失われたが、今は唯一彼のみが、扱う事ができる騎士団の至宝――。

「『輝ける栄光(Shining Glory)』――私、ハルシオンがそれで吸血鬼を倒す所を初めて見た……」

「アナーシア様」

騎士――ハルシオンは一瞬眉間をしかめた。

「うわー、よかった！ ハルシオン様がいらして下さって、本当に助かりました……」

アナーシアが口を開こうとした時、よろよろとおぼつかない足取りをしながらも、口調はしっかりとしたエルムが路地の奥の暗がりからやってきた。

エルムも見た所、怪我はないようだった。

「ハルシオン様からもなんとか言って下さい！ 姫ったら、どうしても夜警に行くといつてきかないんです。姫でも吸血鬼には敵わないって散々言ったのに、ぜんぜん僕の言う事をきいてくれなくて……」

アナーシアはエルムの言葉に思わず頬が引きつるのを感じた。

座り込んでいた石畳から鼻息も荒く立ち上がる。

「うるさいわね。その……騎士団も人手不足でしょうから、私も夜警に出ただけよ」

「申し訳ありません。アナーシア様にそのような気遣いをさせてしまうとは」

翡翠色の瞳の騎士――ハルシオンは足元に転がっていたアナーシアの細剣を拾い上げた。

そして彼女の前に近づくと片膝をついてそれを差し出した。

「ありがとう」

アナーシアは剣を受け取り、折れた剣先を見つめ深いため息をついたのち鞘に収めた。

「吸血鬼の力は人間を遥かに上回ると聞いていたけど、剣先をへし折るとは流石に思わなかったわ」

「彼らの力を侮ってはいけません」

「そ、そうね。今後は気をつけるわ」

アナーシアはふと、袋小路の壁際で、呻き声を上げる神官が身じろぎするのを見た。

「あの人、気付いたのね」

まるで他人事のように呟く。

「お待ち下さい」

アナーシアはそちらに向かって歩き出そうとした所を、ハルシオンに肩を掴まれ足を止めた。

「アナーシア様は城にお戻り下さい。あの神官の方は私が面倒をみますので」

ハルシオンの視線は鋭く神官の様子を窺うように注がれている。

「で、でも。まだ夜は始まったばかりだわ」

纏う騎士団の制服と同じように、色白のハルシオンの手を肩からどかしつつアナーシアは粘った。

だがハルシオンの横顔は近寄りがたい程険しく、口調も手厳しかった。

「いいえ、今夜はもう十分です。吸血鬼は外見は人間と同じで、吸血行為に及ぶまでその本性を見分ける事はできません。彼らを倒すのは我が銀光騎士団の務めであるように、アナーシア様、あなたにも務めがある。このアルビオンを統治するものの後継者として、あなたの身に万一のことがあってはならない」

「—いや、全くその通りですよ」

場の空気を明らかにしらせせるまばらな拍手の音が響いた。

それは無様に壁に寄りかかっていた神官のもので、視線が合うと彼はふらつきつつも立ち上がり、こちらへと歩いてきた。

前髪を額の真ん中で分けた銀髪の男。

旅をしているのか、使い込まれた皮の鞆を右手に下げ、銀縁の眼鏡をかけている。

年の頃は二十のハルシオンよりやや年上—二十代後半のように見受けられる若い神官だ。

だがアナーシアは咄嗟に身構えた。

「あなた—ノクレム人!？」

神官の青年は首を左右に激しく振った。

「ち、違います! 私が銀髪だからって、それはあんまりですよ! 確かに、私は旅の神官ですけど、現に私は吸血鬼の女に襲われていた。それを助けてくださったのは、あなたじゃないですか!」

「そうですよ、アナーシア様。吸血鬼が吸血鬼の血を吸うなんて聞いたことがありません」

従者のエルムが傍らで囁いた。

「ごめんなさい。悪かったわ」

神官は安堵したかのように肩をすくめ、唇に友好的な笑みを浮かべた。

物言いにはおどけた感じがあるが、その眼鏡の奥に光る切れ長の水色の瞳には深い知性が感じられる。

「いいえ。隣国ノクレムの悲劇は私も知ってますから。三年前に吸血鬼の集団に襲われて国ごと乗っ取られてしまったのですからね。だからノクレム人に多い銀髪である私を、あなた方が警戒するのも無理ありません」

「旅の神官と言われたが、宿はどこです? 私でよかったですらまでお送りします」

「え、ええ。それはとても助かります。騎士様」

「あ、ハルシオンったら! 私を城まで送ってくれるんじゃないの?」

唇を尖らせるアナーシアにハルシオンが見事な白金の髪を揺らし「えっ?」と驚く。

「アナーシア様にはエルムがついているじゃないですか。エルム、責任を持って姫君を城へお送りするんだぞ」

「は、はい! もちろんです!」

吸血鬼に会ったらどうしようか。

先程までぶるぶる震えていたエルムが、やっとアナーシアを城に連れ戻すことができるので張り切っている。

こいつ。

なんて現金な奴なのかしら。

呆れるアナーシアは、ふとハルシオンが翡翠（かわせみ）色の瞳を細め、自分を見つめていることに気付いた。

「それから、出てきたときと同じように、こっそり部屋にお戻りになるんですよ、アナーシア姫。忘れずに、騎士団の制服もお返し下さい。盗まれた団員が夜警に出られなくて困っておりますから」

むかつ。

アナーシアは頬がみるみる熱を帯びて高揚するのを感じた。

自分の行いを指摘され恥ずかしさを感じたのは、全身白を纏い、月光にも似た白金の髪を靡かせた彼の姿が眩しすぎるせいだ。

「なっ、言われなくてもわかってるわ! 後で覚えてなさいよ、ハルシオン!」

ふふっとハルシオンが笑みを浮かべる。

何か悪い事をしでかした子供のような気分だ。

「じゃ帰るわよ。エルム」

アナーシアは踵を返し、馬の尻尾とハルシオンに言われた蜂蜜色の髪を揺らしつつ、ぷりぷりしながらその場を立ち去った。

◇◇◇

「いいのですか？ 従者の少年一人だけで城に帰してしまっただけで？ あの方はアルビヨンの姫君なのではないでしょうか？」
銀髪の旅の神官は、アナーシアが心配なのか、二人が歩き去った方角を眺めている。

「大丈夫です。あの方の心は強い。魔の者に魅入られる隙はないですから」

ハルシオンはこともなげに呟いた。

「流石、銀光騎士団の騎士長を務めている方だ。吸血鬼のことはよくご存知でいらっしゃる」

「.....」

ハルシオンは目を細めた。

沈黙を返すハルシオンの心境を察して、銀髪の神官は彼に向かって右手を出した。

「ハルシオン様。私はまだ名乗っておらず大変失礼しました。私は各地に伝わる吸血鬼の伝承を収集する目的で旅をしている、ミルフオーク国出身のノムリスという者です」

ハルシオンは差し出された手ちらりと見下ろしただけだった。

ノムリスはその気まずさに唇を一瞬歪めたが、ハルシオンが白銀の銃をまだ右手に持っていることに気付いた。

「その右手に持っていたら、吸血鬼を倒す事ができる騎士団の至宝『輝ける栄光(shining glory)』ではないでしょうか？」

ハルシオンは右手に持った華奢な銃を腰に吊っている革具に収めた。色白の指がすっと銃身をなぞる。

「.....これをご存知とは。吸血鬼の伝承を収集しているというのは嘘ではないようですね。私も夜警の仕事がありますから、できればあなたをさっさと旅籠まで送って、職務に戻りたいのが今の率直な心境です」

「これはお仕事の邪魔をして申し訳ありません。それならば、アルビヨンの中央にある教会まで送ってもらえませんか？」

「教会、ですか？」

「ええ。さっきも言いましたように、私は各国に伝わる吸血鬼の記録を収集するのが旅の目的です。アルビヨンの教会には数多くの蔵書があるとききますから是非立ち寄って見たかったです」

ハルシオンは頷いた。

「わかりました。教会ならここからさほど遠くではありません。では行きましょうか」

「はい」

銀髪の神官――ノムリスは眼鏡を押し上げ、先を歩くハルシオンの後に続いた。

アルビヨンの街は教会を中心に円を描くように家々が建てられている。

五つの尖塔を持つ教会は増改築を繰り返し、一番古い所は七百年を過ぎているともいわれている。

尖った槍を思わせるその鉄の門は、すでに深夜という事もあって閉められていたが、ハルシオンは裏手に回り、ランプの明かりが灯されている通用門の扉を拳で叩いた。

人間と区別がつかない吸血鬼は神の家にも平気で入ってくる。

アルビヨンの街の扉には、小さな覗き窓がついていて、住人は必ずそれで来訪者を確認してから扉を開ける。

覗き窓から修道女と思しき年配の女性の目が覗いた。

「これはハルシオン様」

「アルファージ司祭長に会いたいのですが、今夜はもうお休みになられていますか？」

灰色のヴェールを被る修道女が一瞬頬を赤く染めて小さく頷いた。

「お部屋におられますので、騎士長さまがいらしたことを伝えてまいります。しばし、お待ちを」

修道女は覗き窓を閉めた。

さほど待たされることなく、今度は扉が開いた。

「よお、ハルシオン。お前が来るなんて珍しいな。こんな時分に何の用だ？」

そこには黒の司祭服に銀の十字架をかけただけの男が立っていた。

緩やかにうねる黒髪は肩口ほどまで伸びており、司祭服の下からでもひきしまった筋肉の持ち主であることが扉の明かりからでも察することができる。

ハルシオンはさりげなく視線を男から逸らせた。

アルファージには昔世話になったことがあるので、その頃からの知り合いだが年上ということもあって苦手でもある。

ハルシオンは身を引いて後に控えるノムリスを紹介した。

「あなたにお会いしたいというので、こちら、ミルフォークのノムリス神官を教会まで送ってきたんです」

「ほう」

アルファージはノムリスを訝しげに見つめながら、胸の十字架に手を伸ばし微笑した。

「ミルフォークとは。これは遠路遙々ご苦勞なことですな。教会は助けを求める者の来訪を拒まない。神の意思にその者が背かぬ限り。ようこそ、ノムリス神官。私は司祭長のアルファージです。どうぞ中へ。来訪を歓迎しよう」

ノムリスは微笑し会釈した。

「ありがとうございます。司祭長様には、今夜一晩の宿の提供と、教会に保存されている吸血鬼にまつわる記録を見せてもらえないか、それをお願いしに参りました」

陽気だったアルファージの目元が笑みを作ったまま強張った。

「宿はともかく――吸血鬼、とはね。穏やかじゃないな」

アルファージの声は低く棘を含んでいた。

「まあ、それは構わないが」

「.....では、私はこれで失礼しますね」

ハルシオンはノムリスとアルファージの交渉がまとまったことを見届けて声をかけた。

「本当にありがとうございました。ハルシオン様」

ノムリスがハルシオンの両手を握りしめて感謝の言葉を口にする。

それをなんとか振りほどき、踵を返したハルシオンの背中へアルファージが呼びかけた。

「ハルシオン。ちょっと待て。折角来たんだ。987年のエディラ酒が手に入ったんだ。お前も中に入って飲んで行けよ」

陽気なアルファージの声にハルシオンは内心ため息をついた。

嫌々振り返り、その満面の笑みを浮かべる司祭長へ皮肉を投げつける。

「ご冗談を。あなたの一日の務めは終わったんでしょですが、私にはまだ夜警の仕事があるのです。では」

ハルシオンは蔑む様に冷たく言い放った。さらりと白金の髪を揺らし頭を軽く下げると教会から足早に立ち去った。

「.....仕事、ね。少しは休んだって構わないと思うがな」

教会の扉にもたれアルファージが腕を組みながら呟く。

その手には陶器のパイプがいつの間にか載っており、白い煙草の煙が立ち昇っている。

「仕方がありませんよ。この街はハルシオン様に護られているんですから」

「.....やれやれ」

アルファージが一瞬絶句するように声を漏らした。

ノムリスを中へ入れ扉を閉める。

振り返りざまにアルファージは口を開いた。

「あんた、旅の神官だったよな。どこでハルシオンと出くわした？」

「え？ あ、ああ。それはですね、先程吸血鬼に襲われていたのを、ハルシオン様に助けていただいたのです。まさかこの目で本物の『輝ける栄光(Shining Glory)』の光を見ることができるとは――興奮しました」

「ほう。アレを知ってるのか」

「そ、そんな怖い顔で見ないで下さいよ。私は母国ミルフォークの司祭長から命じられて諸国を巡り、吸血鬼についての伝承を収集しています。だから七百年もの間、吸血鬼と戦い続けているアルビヨンの銀光騎士団の存在は知ってますし、騎士団の至宝――輝ける栄光――という銃をハルシオン様が唯一扱えることも知ってます」

「何のために吸血鬼の伝承を調べている？」

ノムリスは目を伏せ眼鏡の縁に手を当てた。

「吸血鬼という存在の謎といましようか.....例えば、彼らは何故存在しているのか。存在し続けているのか。それを倒し続けると彼らはいつかはこの世からいなくなるのだろうか、とか。今では私自身が各地の伝承のことを調べるのが楽しくなり、こうして吸血鬼発祥の地までやってきてしまったんですけどね」

アルファージはパイプを吸おうとしたその手を途中で動かすのを止めた。

「ちょっと待て。今のは聞き捨てならないな。アルビヨンが吸血鬼発祥の地、だと？」

「あ、ああ。私としたことがすみません。誤解を与える言い方をしうっかりしてました。発祥というか、アルビヨンの地には特別な存在が隠されているらしいのです。そうだ。司祭長ならご存知ないでしょうか？」

ノムリスはそこで間を置きアルファージの黒い瞳をじっと見つめた。

「吸血鬼たちの始祖である『黒き聖母・グロリア』。彼女のことを聞いたことはないですか？」

「.....何を言い出すのかと思えば」

アルファージが突如はははと笑い出した。

「黒き聖母――？ 吸血鬼の始祖、だって？ そんな物騒なものきいたこともないし、残念ながらアルビヨンにはいないだろうよ。アルビヨンは吸血鬼と戦い続けているが、国を奪われたことはないんだからな。それよりもノムリス神官。吸血鬼に襲われてさぞ体が冷えただろう？ 暖めたワインでも飲めば、その高ぶった神経も少しは治まることだろうよ？」

」

ノムリスが密やかに笑んだ。

「私が酒をたしなむと、どうしてお分かりになったんです？」

「そんなの決まってるだろ。勘だよ、勘だ」

アルファージはノムリスを伴って食堂へと案内した。

【2】 白金の十字架

アルビヨンの城下町は小高い丘の上であり、白亜の石で積まれた二重の城壁で囲まれている。その城壁の外には、北はノクレム国の国境まで広大な森が帯のように続いている。その黒い森の影が朝日に照らされて赤く染まる頃、ハルシオンの夜警は終わる。アルビオンには三つの騎士団がある。それぞれが担当する持ち場によって騎士達が振り分けられているのだ。女王と城を護る近衛騎士団と、国を護る城騎士団。ハルシオンが騎士長を務める「銀光騎士団」は、対吸血鬼のためだけに組織された特別な騎士団である。吸血鬼は獲物である人間を求めて夜活動するので、銀光騎士団は夜勤が主となる。

夜警を終えたハルシオンは、城の出入口に近く設けられた騎士団営舎へと戻る。城を護る近衛や城騎士団とは違い、銀光騎士団は毎晩城下町の夜警に出るので、門の近くに営舎が建てられているのだ。この一角は四階建ての騎士達の宿舎は勿論、剣術や銃の射撃のための演習場もある。動きが素早く力も強い吸血鬼には、気付かれる前に彼らの体へ銀を詰めた弾を撃ち込むのが最も有効な攻撃手段だった。銀光騎士団への登用は、射撃の腕が何よりも重視される。

「騎士長、お疲れ様です！」

「ただ今戻りました」

「ああ。無事でなによりだった」

朝日が昇り周囲が薄明るくなると、夜警を終えた騎士達が二名一組で戻ってくる。

夜警は必ず二人で組を作る。何かあった時、一人が城の本隊へ連絡に走るためだ。

彼らが全員無事に戻ってくる事が、ハルシオンにとって何よりの望みであり願いでもある。

ハルシオンは夜警に出た最後の一人が戻るまで営舎の前に立ち、王城の門をくぐる騎士を待つ。

銀光騎士団は百名というこじんまりとした規模だが、相手が人間ではなく『吸血鬼』ということもあり、近衛騎士団よりも選考基準が厳しい事で知られているが、家族を吸血鬼に殺されて、それが入団志望となって城までくる者も最近が多い。

今朝も団員は全員無事に帰還した。

それを見届けたハルシオンはようやく営舎の二階にある執務室へと戻る。

朝日が差し込み明るくなった執務室には、すでに白い騎士団の服を纏った背の高い黒髪の副官が、机の前に立ち待っていた。ハルシオンより二つ年上の青年で、動作や物言いにはきびきびとしたものがあり、彼の腰のベルトには、白銀に輝く銃が吊るされている。

「ハルシオン様。昨晚の夜警の報告書です」

「ありがとう、ルクシエル」

ハルシオンは彼から三十枚弱ある紙の束を受け取り椅子に腰を下ろした。執務机の上には他に、白い湯気を立てる陶器のカップが置いてある。香草と干した豚肉を細かく刻んで煮込んだ野菜スープの香ばしい匂いがする。ハルシオンは誘われるようにそのカップを手を取った。

一口啜ると早朝の空気で冷えた体にスープの温かみがじんわりと広がっていく。

いつもながらルクシエルの気遣いには頭が下がる思いだ。

そんなハルシオンの様子を満足げに見ながら、ルクシエルが落ち着き払った口調で報告を始めた。

「昨晚の退治された吸血鬼の数は二体です。うち一体はハルシオン様が退治、もう一体は、城門付近で衛兵に噛み付いていた所を団員がを見つけ、退治いたしました。衛兵の傷は浅く命に別状はありませんでした」

「そうか。それはよかった。昨晚は犠牲者はなしということになるが……」

ハルシオンは眉間をしかめ、手にした一番上の報告書に視線を落とした。

ルクシエルは単に夜警に出た騎士達の報告書を持ってきただけではない。

ハルシオンは毎朝十時にアルビオン女王に必ず謁見し、夜警の報告をすることになっている。

だから、報告すべき重要事項がある順番に、ルクシエルは報告書を並べ替えている。

最も、何を重要視するのはハルシオンが最終的に判断する。

ハルシオンはざっと報告書に目を通し、ルクシエルの並べ替えた順番のまま机の上に置いた。

昨夜は二体の吸血鬼が出没したことぐらいしか、気になる事はなさそうだ。幸いな事に。

「……この所、毎日だな」

数が少ないとはいえず、毎晩吸血鬼が出没、そして退治されている。

ハルシオンの憂いを感じて、ルクシエルも不安げに視線を地に落とす。

「はい。確実に、アルピヨンの中に侵入する吸血鬼の数が増えています」

「……」

ハルシオンは執務机に肘を突き、無意識のうちに右手で首から下げた鎖に触れた。

それは銀よりも白く輝く白金（プラチナ）で、一つ一つが十字の形をした珍しい鎖であり、その先には古風な装飾が施された同じく白金で作られた美しい十字架がぶら下がっている。

ハルシオンはそっと十字架に触れた。白く輝く十字架の中央には、鮮やかでかつ深みを帯びた真紅の宝石が一つだけ嵌め込まれている。

「それは違うな、ルクシエル。アルピヨンに吸血鬼が新たに入り込んでいるんじゃない。吸血鬼にされる人間が、増えているのかもしれない」

ルクシエルの青灰色の瞳がすっと細められた。

「やはり——騎士長もそう思われますか」

動揺を辛うじて抑えたルクシエルの声に、ハルシオンは静かに頷いた。

「最近顕著に出没する吸血鬼は、皆能力が劣る低級なものばかりだ」

吸血鬼にも能力差があることを、ハルシオンは知っている。

なによりも七百年という長い間、彼らと戦い続けている『銀光騎士団』の残されている記録書にそうある。

歴代の騎士長が書き連ねてきたその記録書によると、吸血鬼には生殖能力がなく、吸血鬼同士は勿論、人間と交わっても子供は生まれない。

それなのに、何故、吸血鬼は存在するのか。

それは、吸血鬼が仲間を増やす方法はただ一つ。

自らの血を人間に与えるというものである。

けれど吸血鬼自体の能力がある一定の水準より上でないと、血を与えた人間はただ飢餓のために人の血を求める化物に成り果てるだけで、その能力は勿論低級であり、寿命も人間並みに短いという。

「私が昨晚出会った女の吸血鬼もそうだった。飢えて人の血を求める獣のような吸血鬼だった。本来の彼らの姿は、夜の空気を好む繊細で優美な生き物で、我々人間と同じ容姿を持つ——いや、それ以上に美しい存在故に、自ら望んで吸血鬼になることを求めた人間がいたという。相手が吸血鬼と知っていて、結婚する若い娘もいたそうだ」

「報告書を見る限りでは——そんな見目麗しい吸血鬼と遭遇した団員はいないようです」

ルクシエルは肩を竦め皮肉をこめた目でハルシオンを見た。

「吸血鬼の容姿はどうであれ、元凶の吸血鬼を探し出し、彼らを葬らねばなりません。ハルシオン様。我々が退治している吸血鬼は、低級の吸血鬼にされた哀れなアルピヨンの民なのです。そして、我々が彼らの命を奪っている……」

ハルシオンは席から立ち上がった。

そろそろ女王との謁見の時間だ。それが終わったら、近衛と城騎士団長との定例報告会に出なければならない。

「ああ。その通りだ。今夜から夜警の巡回箇所を絞って実施する事にする。ここ一週間で吸血鬼が出た地区を重点的に、通常の警備は元より、本当の吸血鬼が潜む場所がないか調べるんだ。人が多く集まる旅籠や酒場、踊り場など、目星はルクシエル、君に任せる」

「はっ」

ルクシエルが頷く。

「陛下との謁見が済んだら、近衛と城騎士団の騎士長にも報告をして、吸血鬼が潜みそうな場所に心当たりがないか、団員にきいてもらえないか助力も頼んでみる」

「それはよいことだと思います。情報は多ければ大いに越した事はありません。そうだ、ハルシオン様。教会のアルファ

ージ司祭長にもこのことを話してみてもいいでしょうか。教会には多くの民が祈りに訪れます。最近変わったことや、見慣れない者を見たとか、住民に尋ねてもらっては」

ハルシオンは頼もしげにルクシエルを見つめた。

「私はそこまで考えてもみなかった。確かに騎士達より住民の方が様々なものを見聞きしているに違いない」

「それでは私は騎士長が謁見から戻られる頃に、今夜の巡回地区の予定表を作成して、机の上に置いておきます」

「ああ。戻ったら確認する。ルクシエル」

ルクシエルが執務室の扉を開けてくれたので、ハルシオンは女王に謁見するべく外に出た。

◇◇◇

「でや——あっ！」

「参りました！ 姫」

アナーシアは先をつぶした練習用の剣をたもとに引き寄せた。

足元には剣を弾き飛ばされた近衛騎士の剣術指導として名高いザイル老が、尻を地面につけて座り込んでいる。

「今日の姫の剣には、いつになく鬼気迫るものが感じられますわい」

アナーシアは上がった息を整え、ザイルに向かって皮手袋をはめた手を伸ばした。

「すみません、よっこいしょ」

アナーシアの手を借りてザイルが立ち上がる。額にはうっすらと汗の玉が浮いている。

「ザイル様。今日は姫、機嫌が悪いんです」

アナーシアに恐る恐る従者のエルムが汗を拭くための布を手渡す。

「……女王陛下に昨晚、こっそり城を抜け出して夜警に出ていたことがばれちゃったんですよ。それでアナーシア様今月一杯、城の外に出ることが禁止になっちゃったんです」

「ほほお。それはそれはお気の毒に……」

ザイルが目を見開いてアナーシアを見た。

アナーシアはぎりと言が聞こえるくらい歯を噛み締めた。

エルムからひたたくるようにして布をつかむ。

「余計な事は言わなくていいエルム！ ああ、もう……ハルシオンのせいに違いないんだから……！」

アナーシアは布を顔に押し当てた。

昨夜城にはこっそりと戻ったはずなのだが、翌朝何故か女王である母にそのことがばれていた。

アナーシアはみっちりと一時間母親から説教を喰らったのだ。

心当たりがあるとすれば、城内でアナーシアの脱走を知っていたのはエルムとハルシオンだけだ。

だが従者であるエルムが母に告げ口するとは思えない。ばれたら反対に監督不行届きでエルムも母にきつく叱られるのがわかっているからだ。とすれば、後はハルシオンしか考えられない。

母は毎朝十時に各大臣や騎士長の報告を受けるから、その時にハルシオンが言ったに違いない。

「今月はアルビヨンの仮装行列祭りと薔薇祭が城下であるのよ！ あれを見にいけないないんて信じられないわ」

「自業自得ですよ……」

アナーシアは顔に押し当てていた布をエルムに向かって投げつけた。が、勘の良い従者は見事にそれを受け止めた。

「くっ！」

それが面白くないアナーシアは、エルムに練習用の剣を押し付けて、城内に向かってずかずかと歩き出した。

「姫、どちらへいかれるのです？」

エルムが慌てて後から走ってきた。

アナーシアは振り返った。その勢いで馬の尻尾のように結い上げた蜂蜜色の髪がふわりと舞う。

「――汗をかいたから沐浴するの！ 付いて来たら殺すわよ！」

今ならエルムをその眼力だけで睨み殺せるかもしれない。アナーシアの瞳がぎらりと光る。

「わ、わかりました。僕は部屋で待機してます！」

「ええ、そうした方があなたの身のためよ！」

アナーシアはぷりぷりしながら城内に入った。

沐浴場へ向かう石造りの廊下を歩き、角を曲がった所で壁を背にして息を整える。

エルムが反対側の廊下へ歩いていく足音が聞こえる。勿論、こちらへ来る気配はない。

アナーシアは深呼吸をした。あくまでも高ぶった感情を鎮めるためなのだが、怒りは腹の底で炎のように渦巻いている。

こっそりと部屋に戻って、あなたが言ったのに。

まさか、母に報告するとは思わなかった。

住民が夜な夜な吸血鬼に襲われていることをハルシオンから聞き、アナーシアはアルビヨンの姫として何もできないことを密かに憂いていた。そして得意だと思っていた剣術も、昨夜、吸血鬼の常識外れな力の前に役に立たないことを思い知らされ、あっさりとその自信が砕け散った。

今まで自分のやってきた研鑽は無駄だったのだろうか。

アナーシアの苛ついている原因の大半は、自分の剣術が吸血鬼に通用しなかったことなのだが、併せてハルシオンに文句の一つでも言ってやらないとそれが治まりそうにも無い。

「……」

アナーシアは庭園へと出ていた。

城の南側にあるそれは背の高い木々がこんもりと茂る小さな森のようになっていて、細い小道が散策の為に作られている。

日暮れかけた茜色の空を見上げ、アナーシアはその小道へと歩き出した。

森へと入ると火照った首筋に木々の吐き出す新鮮な空気の冷たさを感じた。

この森の奥には小さな東屋がある。

アナーシアが小さい頃は乳母がここまで連れて来てくれて、勉強したり疲れたら椅子に腰掛け眠ったりしたものだ。

懐かしい小道を歩きながら、アナーシアは研ぎ澄まされた自分の気を徐々に鎮めていった。

何故気配を消すまねをしたのか。

木々の落とす木漏れ日が降り注ぐ光の下で、丸い天井がついた小さな石造りの東屋が見えて

きた。

東屋には緑の眩しいつる草がいくつも巻きついている。

アナーシアは足音を立てないよう、息を潜んでそっと近づいた。

アナーシアは知っている。

いや、アナーシアだけが知っている。

この東屋で、ハルシオンが夜警に出る数時間前に時々仮眠をとっていることを。

アナーシアはことさら自分の気配を消して東屋の入り口まで歩み寄った。

覗いてみると思惑通り、銀光騎士団の騎士長は中にいた。東屋の入り口に佇む聖人の像のように身じろぎ一つせず、壁に背中を預けて眠っていた。

いや、アナーシアの目には彼自身が大理石の像のように見えた。

夜警が主な仕事のせいか、ハルシオンの肌は陽に焼けた事がないのか女であるアナーシアが羨むほど白い。銀光騎士団の白い制服の上にかかるハルシオンの長髪は月光を思わせる見事な白金（プラチナ）だ。しかもアナーシアのような癖の強い髪質ではなく、掌の上でさらさらと音を立てて流れ落ちる流水のように美しい。

そして彼の首にはアナーシアの見たことのない文様で装飾が施された白金の十字架が掛かっていた。

すべてが白に彩られた中で、唯一の色――十字架の中央に嵌め込まれた真紅の宝石が一際鮮やかに見えた。

銀光騎士団の至宝――今ではハルシオンしか扱う事ができない、唯一吸血鬼を灰に帰すことができる『輝ける栄光』と名づけられた銃は、この十字架が形を変えて出現するのだという。

アナーシアはハルシオンが自分の存在に気付いて目を覚まさないように、息を殺して彼の顔を眺めていた。

ハルシオンが人目を忍ぶようにここで仮眠をとっているのは理由がある。

初めて彼がここで眠っていたのを見つけた時、驚いて尋ねたのだ。

「眠いならちゃんと寝台で寝なさいよ」

ハルシオンは、皆が仕事をしている真昼間から自分だけ部屋で寝るわけにはいかないと答えた。

「馬鹿ね。ハルシオンは皆が寝ている夜に働いているのよ。ちゃんと仕事してるんだから、堂々と部屋で休めばいいわ。それをハルシオンがさぼってる、っていう輩がいるなら、これは――そう、命令。アルピヨンの姫としての命令。ちゃんと部屋に戻って休みなさい」

その時ハルシオンは一瞬戸惑うようにアナーシアの顔を見つめていた。

「お気遣いいただいてありがたく思います。アナーシア姫。ですが部屋よりも緑の木々に覆われたこの東屋の方が、私は気が休まるのです。ここでしばし密かに仮眠を取る事をお許し願えませんか」

この時アナーシアは十四歳だった。ハルシオンもまだ十代のあどけなさが瞳に残る十七歳の少年だった。

そう。

ハルシオンは『輝ける栄光』と名づけられた騎士団の至宝の使い手故に、三年前、銀光騎士団の騎士長を拝命したのだった。

「.....私はもう十七になったわ。あなたの背に追いついて、共に吸血鬼をこの国から追い払いたいと思ってるのに――」

ハルシオンは眠っている。

東屋で眠っていたのを初めて見た三年前と、その寝顔は少しも変わっていない。

彼自身が言っていたが、森の落とす木々の葉の影や涼やかな風を感じられる東屋の方が気持ちが落ち着くのだと。

アナーシアは無言でその場を立ち去った。

吸血鬼と戦うハルシオンが、その緊張から開放される唯一のやすらぎの時を、自分の我侷で壊すべきではないと思ったから。

城出を告げ口された怒りはアナーシアの中からいつの間にか消え去っていた。

【3】 黒き聖母

アルファージは司書室に入るとこぼんと軽く咳払いをした。

揺れる蠟燭の光に映えるノムリスの銀髪頭が一瞬ぴくりと動き、彼はまるで時を忘れているかのように視線を彷徨わせた後、ようやく傍らに佇むアルファージの存在に気付いた。

「……随分と熱心だな。夕食の時間だと呼んだのに」

「ああ、これは司祭長様。すみません」

ノムリスはずりさがってきた眼鏡を手で押上げながら、ばつが悪そうに薄紫色の瞳を細めた。

「なんせ、吸血鬼についてこれだけの豊富な資料があるとは思ってもみなかったので、興奮しているんです」

アルファージは内心辟易した。

あんなおぞましいものの記録を読んで興奮するなど、俺にはさっぱり理解できん。

アルファージは様々な書籍や記録書が積まれているノムリスの卓上をげっそりとした顔で見つめた。

「まあ、見たい資料があったら声をかけてくれ。協力はするし、吸血鬼が出て物騒な街だが、好きなだけ滞在してここで伝承を収集するのも構わない」

「よ、よろしいんですか！」

がたん、と音を立ててノムリスが席を立った。

子供のように瞳をきらきらさせてアルファージの両手を握りしめると、それをぶんぶん上下に激しく振る。

「ありがとうございます！ いえ、これらの資料を読むのは勿論、分析したりするのにひと月ほど滞在させて欲しいと思っていたんです！ 本当に本当にありがとうございますっ！」

「……あ、ああ……もう、好きにしてくれればいいから……」

アルファージは目眩を覚えながらも、この物好きな旅の神官の脳みそはどうなっているんだろうと思った。

「そこで、早速お聞きしたいことがあるのですが」

ノムリスはやおらがさごと積み重ねている卓上の本を漁り、比較的新しい表紙の冊子を取り出した。

ぱらぱらと頁をめくり、小さく頷く。

どうやら自分用の覚書に使用しているもののようだ。

ちらりと見えた範囲でだが、そこにはびっしりと蟻のように細かく書かれた文字や、石碑の記号を写したような図形が描かれているのが見えた。

「アルファージ司祭長。実は尼僧の方にもお聞きしたのですが、アルピオンは三年前に吸血鬼の集団に襲撃され、あわや隣国ノクレムと同じように、侵略される危機に晒されたそうですね」

「……」

アルファージは嫌悪感も露に顔を歪めた。

ノムリスから顔を背け吐き捨てるように呟く。

「――アルピオンの住人なら、あの時の事は誰も思い出したくないだろうよ」

それはアルファージの抱く正直な感想だった。

「ご不快な思いをさせて申し訳ありません。アルファージ司祭長。尼僧の皆さんにも同じように言われました。それは重々承知です。しかし――」

アルファージは右手を上げて後頭部を搔いた。

ノムリスは吸血鬼のことについて各地を旅して回り、その伝承を集めている。

アルファージがどんなに不快に思っても、彼はその話を聞きたがるだろう。

無意識のうちに重々しいため息がアルファージの口から漏れた。

「……アルピオンの歴史の中でも、あの時が一番やばい状況だったことは間違いない。なんせ、突然だったからな。新月の夜、いきなり大群の吸血鬼が現れて、就寝中の人々を襲ったんだ。これは後になってわかったことだが、吸血鬼にされた門番が、彼を吸血鬼にした元凶の奴に意識を操られ、アルピオンの城門を開いたんだ。だから奴らは堂々と門からアルピオンの街へ入ってきた」

「それは……まるで、最初からそうなるように、計画されていたみたいですね」

ノムリスの薄紫色の瞳は傍らの蠟燭の炎のように爛々と光っている。右手に握るペンが素早く覚書の上を走る。そ

れを横目で見ながらアルファージは両腕を組んで頭を振った。

口に出したものは仕方ない。

アルファージは観念してノムリスの隣の椅子に腰を下ろした。

「奴らはそう——その気になれば、いつだって三年前と同じように、我々を襲えるということだろう。吸血の衝動さえなければ、隣人として暮らしていたってわからないんだからな。でも、三年前は違う。奴らは信じられない数で——恐らく三百は下らなかつただろう——アルピオンを襲撃し、本気でアルピオンを奪おうとしていたんだ」

「……」

アルファージはノムリスに向かって唇を歪め微笑した。

何も言わず右腕を上げて、黒い司祭服の袖を捲り上げる。

そこには獣にでもひっかかれたような惨たらしい傷跡が三本ついている。

よほど深くえぐられたのか、その傷の部分は肉が少し削げており、今も赤黒くみみず腫れのようにになっている。

「俺も吸血鬼に襲われた。だが、彼に助けられた」

「彼？」

多分ノムリスはアルファージが誰のことを言おうとしているかわかっている。

アルファージは司祭服の袖を元に戻し、再び虚しくため息をついた。

「銀光騎士団の撃つ銀の弾丸でも、上級の吸血鬼を即死させるのは難しい。奴らは驚くほどの自己回復能力を持っている。アルピオンの住人達は血を求める吸血鬼に襲われ、何人もがその牙にかかった。彼らを守るため騎士たちが必死で戦ったが、最後は街を捨てて王城まで撤退を余儀なくされた。城門に詰め寄る吸血鬼がどんどん増えて、城騎士達が火矢と煮えた油で応戦しても、奴らに決定的なダメージを与える事ができなかった。多分、彼が来なかつたら、騎士達は夜明けまで城を守る事ができなかつただろう——」

「それは……」

アルファージはうなずいた。今でもはっきりとあの日の夜明けは覚えている。

「白みかけた空の彼方で、白銀の光が天を突いた。同時にその光に触れた吸血鬼たちは、凄まじい悲鳴を上げて灰塵と化した。城に逃げ込んだ俺達は、何が起きたのか初めはよくわからなかつた。夜明けを迎える空に何度あの神々しい白銀の光が煌いたことだろう。そのうち、城内に入ろうとしていた吸血鬼が少しずつだがいなくなっていって。城の門を守っていた騎士達が撤退する吸血鬼を追い払い、城門を開いた所、その前には一人の少年騎士がいた」

「少年、ですか」

ノムリスが椅子から身を乗り出してアルファージを食い入るように見つめている。

「ああ。彼は城門に背を向けて、光り輝く白金の十字架のような——そう、あれは十字架に似ていたな。そんな武器を右手に持っていた。火薬のような発射音はなく、だが、彼が銃のように構えて狙いを定め引き金を引くと、吸血鬼を灰にした白銀の光がその銃口から溢れた。吸血鬼たちは恐れをなし遁走していったよ」

ノムリスは眼鏡の縁に手をかけ、厳かな口調で呟いた。

「『輝ける栄光(shining glory)』……」

「ああ。誰もその名を口にした。アルピオンには吸血鬼を一撃で葬り去る事ができる武器がある。子供だましの御伽噺の中に出てくるただの噂だと思っていたよ。だが、あの十字架のような銃から発せられた光を目の当たりにした途端、それしかないと思った」

「アルファージ司祭長。では、その時の少年騎士が——」

アルファージは目を閉じた。何故か胸が締め付けられるように痛んだ。

その名を言うのに口が重くなかなか声が喉から出ない感覚に襲われる。

アルファージは唾を飲み込み息を吸った。軽く咳払いすると喉のつかえがやっと取れた。

「そうだ、ハルシオンだ。だが、あの時の彼は俺の知っているハルシオンじゃなかつた」

「どういうことですか？」

当然の如く問いを返したノムリスをアルファージは睨みつけた。

「考えてもみる。常識的にあり得ないだろう！ 吸血鬼を瞬殺するあんな物騒な武器。どこでみつけたのかは知らないが、どうやって十七の少年が扱えるっていうんだ！」

アルファージは今でも悪寒が背中を走り抜けるのを感じた。

「俺はハルシオンの家族と付き合いがあった。だから彼がとても小さな頃から知っている。彼は母親似の黒髪だった。だが俺は一瞬、城門の前に立つ少年が、ハルシオンだとわからなかった。あんたも知ってる通り、彼の髪はその時白金（プラチナ）に変わってしまっていた。きっと『輝ける栄光(shining glory)』の力を使ったせいだろう。吸血鬼を退けて、彼らの気配が無くなった途端、ハルシオンがその場に膝を付いた。俺は駆け出していた。ざわめく騎士達を押しつけてハルシオンに近づいた。彼の右手が不意に眩い白い光に包まれたかと思うと、あの不思議な銃は消え失せて、代わりに白金の十字架が朝日に輝いていた。

ハルシオンはその十字架を両手で握りしめて震えていた。心ここにあらずというように視点が定まらず、俺がその肩をつかまえて呼びかけると、はっとして俺の顔を見た。その時――」

アルファージは声を詰まらせた。

額がいつの間にか汗ばんでいた。

たまらずポケットに手をつっこみ、ハンカチを取り出す。

「何を、ご覧になったのですか？」

ノムリスが静かに問うた。

「いや……多分、俺の見間違いだと思うんだがな。悪いが本人にも言ってないんだ。ここだけの話にしてくれ」

額の汗をハンカチで拭い、アルファージは努めて平静を保とうとした。

「はい。わかりました」

ノムリスが頷くのを見て、アルファージは再び口を開いた。

無意識のうちに声のトーンが下がる。

「ハルシオンの瞳がな、一瞬、真紅に見えたのさ……吸血鬼みたいに。でも俺が呼びかけた途端、ハルシオンは気を失ってしまった。まるで誰かが操っていた人形の糸が切れたみたいに、その場でぶっ倒れてしまったんだよ。目を覚ましたのは三日後だった。でもその時の彼の目は、あの明るい翡翠（かわせみ）色だった」

「……実に興味深いお話です。お聞かせ下さって、ありがとうございます。アルファージ司祭長。それにしても、ハルシオン様はどこである『輝ける栄光(shining glory)』を手に入れたのでしょうか」

「さてね」

アルファージは肩をそびやかしそっけなく答えた。

「誰しもがハルシオンに尋ねたが、ハルシオンは答えることができなかった。あの時、吸血鬼を追い払った時の記憶がすっぽりと抜け落ちてしまっていたのさ。だからどこでアレを手に入れたのかは勿論覚えていないそうだ」

「……そう、ですか……」

ノムリスの顔にはありありと失望感が漂っていた。

だがアルファージが視線を向けると、その横顔に浮かんでいた失意の色は消えていた。

「司祭長。貴重なお話を聞かせて下さったお礼に、私も一つ、お話したいことがあります」

「ほお。伊達に各地を巡って吸血鬼の伝承の収集をしているわけじゃないか。吸血鬼に狙われ続けるアルビヨンのために、何か役に立つ話なら喜んできかせてもらいたいね」

アルファージが冗談めかして呟くと、ノムリスは期待に添えるかどうかはわからないのですが、と前置きして話し始めた。

「アルピヨンの国は実は七百年前、ここからもっと北の方にありました。ひょっとしたら、司祭長はご存知だったかもしれませんが」

「いや、俺は知らんぞ。初耳だ」

アルファージは頬杖をやめてノムリスを凝視した。

「そうですか。それなら……ご存知ないのは仕方がないのかもしれませんが。この教会が建てられたのは今から七百年前です。私が見た所、それ以前の記録はここには全く保存されていません。つまり、七百年よりも前にアルピヨンという国があったことを知るのはとても難しいことでしょうね」

「ほお……これはとても勉強になった。俺は見ての通り、司祭長として最低限の仕事しかしていない生臭坊主でね。では、博識な旅の神官どのおききしたいが、ひょっとして七百年前もアルピヨンはここから遙か北の地で、吸血鬼と戦っていたんだろうか？」

ノムリスは表情一つ変えることなく静かに頷いた。

「ええ。その通りです。加えるなら、三年前と同じようなことが七百年前にも起こり、アルピヨンの女王は民と共に、国を捨ててこの地へ逃げる事を選択したのです」

「なんだって？」

アルファージは思わず椅子から腰を浮かせた。

おいおい。どういうことだ。

心臓の鼓動が早くなって、自分でも興奮しているのがわかる。

動揺するアルファージとは対照的に、ノムリスは足を組み優雅に腰掛けたまま微笑している。

「吸血鬼たちがアルピヨンを襲ったのは目的がありました。彼らの『始祖』である吸血鬼が、代替わりの時期を迎えていたからです」

「始祖？」

眉をひそめるアルファージ。

「ええ。吸血鬼には『始祖』と呼ばれる、強大な力を持つ王がいます。平均的な吸血鬼の寿命が二百年であるのに対し、始祖は千年ともいわれます。そして、『始祖』さえいれば吸血鬼は不滅なのです。吸血鬼が仲間を増やす方法は、人間に自らの血を与えることしかありませんが、当然、始祖の血を飲んだ人間は、強大な力を持った吸血鬼となります」

「なんてこったい……人間とその『始祖』の吸血鬼がいる限り、奴らはこの世から消える事がないということか」

ノムリスは目を伏せ同調するようにうなずいた。

「皮肉な事ですが、そういうことになります。アルファージ様。それで、吸血鬼の始祖の話に戻りますが、今から七百年前、始祖にもついに寿命が迫ってきたのです。彼は次代の『始祖』となる器を持つ人間を探し、アルピヨンで見つけました。吸血鬼に見出されたのは、一人の若い修道女。名前はグロリアといました」

「その名前——どこかで聞いた覚えがあるぞ」

アルファージの問いにノムリスは「ええ」と答えた。

「初めて司祭長様にお会いした時、私が『黒き聖母・グロリア』と言ったことだと思います。彼女の後の異名です——何故、一介の修道女だったグロリアがそう呼ばれるようになったのかといえば、もうおわかりでしょう。アルピヨンを襲った吸血鬼の目的が彼女であることを知ったアルピヨンの女王は、吸血鬼の軍を率いる將軍と内密に取引をしました。グロリアとアルピヨンの地を与える代わりに、アルピヨンの民を襲わない事——。それで、女王は民を連れて現在のこの地へ逃れ、新しいアルピヨンの国を建国しました」

「……にわかには信じがたい話だ」

ノムリスはアルファージの当惑した顔を見ながら肩をすくめた。

「信じるかどうかはおまかせします。ただ、この話にはまだ続きがあるのです」

「ほお。それは面白そうだ。是非聞かせてくれ」

アルファージは寝る前にお話をせがむ子供のように催促した。

「アルピヨンの女王は教会にグロリアを残し、民と共に国を去りました。グロリアはそれに異を唱えませんでした。女王の命令だったからではありません。彼女は元々捨て子で身寄りがなく、自分の身を信仰に捧げていました。まさに聖女というべき清廉な心の持ち主であったのです。けれど城にはまだ数名の騎士が残っていました。彼らの目的は、女王の命令でグロリアを殺すことでした。吸血鬼の『始祖』さえいなければ、彼らはいつかこの世から消滅する絶好の機会だ

と思ったのです。同時に、グロリアもまたその信心深さから、一人の騎士に自分を殺すように頼んでいました。噂では神の啓示を受けたともいわれています。捨てられた時に身につけていた白金の十字架——聖クリュヌスの言葉『悪しきものを輝ける栄光と共に撃ち滅ぼすべし——』が刻まれたそれを渡して、吸血鬼の始祖となった自分を殺すように言ったのです」

「聖クリュヌス——最初に吸血鬼と戦ったとされる聖人の名だな。そうか、それである十字架は『輝ける栄光(shining glory)』と呼ばれるようになったのか」

「そういう伝承が北の地にありました」

ノムリスは控えめに答えた。

「それで、可哀想な聖女グロリアは、吸血鬼の始祖となったのか？」

今度はいつの間にアルファージが椅子から身を乗り出してノムリスの話を聞いていた。

「吸血鬼の始祖はグロリアを迎えに自ら教会へ来ました。そして、そこで彼女に自分の血を与え、吸血鬼にしてから、今度は自分の全ての力を彼女に与えるため、血を吸わせました。こうしてグロリアは、新たな吸血鬼の『始祖』として生まれ変わるはずでした」

「はずだった？」

顔の前で両手を組んだノムリスは、暗澹とした目でアルファージを見つめた。

元から色白である彼の肌が、月光を浴びたように色素が薄くなっていくような気がした。

ノムリスが眼鏡のつるに手を当て、下がってきたそれを直す。語る声は次第に低くなっていった。

「ええ。けれど彼女が『始祖』となった途端、一人の騎士が潜んでいた物陰から飛び出し、聖クリュヌスの十字架を彼女の胸に突き刺しました。同時に、女王の命令で残っていた騎士達が教会へ火を放ったのです。教会は騎士達があらかじめ油をまいていたのでしょ。あつという間に炎に包まれました」

「それじゃあ……グロリアは願い通り、吸血鬼の始祖として生きることなく死にしまったんだな」

アルファージの言葉に一瞬ノムリスは口を閉じ沈黙した。

俯く銀髪頭を横目でみながら、アルファージはふと心に浮かんだ疑問を口にした。

「始祖が死んで七百年経つというのに——国を捨てて新たな土地に移ってきたというのに、我がアルビオンには未だ吸血鬼が夜を闊歩してやがる。これは一体どういうことだ」

「吸血鬼は——始祖の血を飲んだ者は、人間が思わぬ以上の長寿を誇るのだよ」

アルファージは耳を疑った。

ノムリスの口調が今までと全く違う——気がする。

突如、司書室の蝋燭という蝋燭の炎が一斉に揺らめいて消えた。

蝋の臭いが強く鼻腔を刺激する。

月明かりのみが窓から差し込む暗い部屋でアルファージは椅子から腰を浮かせた——途端、背後からノムリスの声が聞こえた。

「他ならぬ私もその一人」

「——！」

アルファージはその場から逃げようとした。

一体何だっていうんだ！

が、力強い手がアルファージの右腕を掴んで机上へと押し付けた。

「くそっ！」

ノムリスが座っていた隣の椅子はもぬけの空だ。

アルファージは必死で体を動かすが、頭を机に押し付ける手は重石を置いたようにびくりともしない。

くぐもったノムリスの声が耳元で囁いた。それは体の血が凍るかと思うほど冷えた声だった。

「アルファージ司祭長。七百年前、グロリアの胸に『輝ける栄光(shining slory)』を突き刺した騎士は、彼女の体をいずこかへと持ち去った。そしてとある場所へとたどり着き、そこに教会を建てたそうだ」

机に顔を押し付けられたまま、アルファージは背筋に緊張が走るのを感じた。

くっくつとノムリスが嘲笑う。

「そう——察しの通り、今まさに我々がいるこの教会だよ。アルファージ」

「ノムリス……お前、まさか！」

「黒き聖母・グロリア。我が吸血鬼の始祖。私はずっと彼女の体を捜してきた。そろそろ彼女の血を飲まなければ、私にも寿命が訪れる」

アルファージは頭の中が真っ白になるのを感じた。

まさか、まさかあのノムリスが吸血鬼だったとは――。

一瞬頭を掴む圧力が失せたかと思うと、アルファージの体は仰向けにされていた。

「――！」

声を出す間もなく、喉元をノムリスの右手が押さえ込む。彼の長い爪が喉の皮膚に食い込むのがわかる。

三年前にも吸血鬼に襲われた。

その時の恐怖がアルファージの唇までせり上がる。

アルファージの顔を覗き込むノムリスは無表情で、ただ二つの真紅の瞳だけが不気味に光っていた。

「もう一度あなたに尋ねてみようか。アルファージ。『黒き聖母・グロリア』の体はどこにある？ ハルシオンが『輝ける栄光(shining glory)』を手にしている以上、彼女の体もここにあるはずだ！」

「……」

アルファージは必死で目だけでノムリスに訴えた。

息ができない。

ノムリスが喉元を圧迫しているので気道が塞がっている――。

ふっとノムリスが笑みを漏らす。

「口に出す必要はない。我々は人間と違い、心を読むことができる。アルファージ、これが最後のチャンスだ。私に血を吸われ皮だけとなって死ぬか、私と共に夜の住人となり無限の命を生きるか、選べ」

【4】 予兆

今日も一日が終わる。

いや、自分にとっては日が沈んでから、一日が始まるというべきか。

西日が差し込む執務室で、ハルシオンは数刻ぶりに顔を上げた。

――考えが浅かったのかもしれない。

ルクシエルがまとめたここひと月分の夜警の報告書から目線を引き剥がし、ハルシオンは執務机の上に投げ出されている地図を見やった。

それは教会を中心に同心円状に広がるアルビヨンの城下町を東西南北と四つに区切り、さらに吸血鬼の目撃情報があった所に金属のピンを一つ一つ刺したものだだった。

けれどそこには完璧な程までに、ハルシオンとルクシエルの期待を裏切る結果が表れていた。

ピンが刺された箇所は、予想に反してももの見事に統一性がなくバラバラだったのだ。

「まいったな。出没地域の絞込みができれば、現れるのを見つけるのではなく、攻勢に転じられると思ったのに」

ハルシオンとルクシエルが立てた仮説は、意図的かどうかは知らないが、真正の吸血鬼がアルビヨンの住人を自分たちの仲間にするべく、特定の屋敷や人々が集まる場を隠れ家に暗躍しているというものだった。

現に過去にもそういうことがあったのだ。

吸血鬼を恐れながらも、彼らに憧れを抱き、進んでその仲間になろうとする人間が――。

人間と吸血鬼の流れる時間は違う。長寿と老いる事の無い体。それを求めてしまうのが人間の弱さである。

富豪で知られる商家の主が、吸血鬼を困い、自らも彼らの眷属になったが、結局は血の渴望のため使用人と自分の家族を皆殺しにした事件など、ここアルビオンには数え切れないくらいあったりする。

「お呼びですか、騎士長」

物思いに耽っていたハルシオンの意識を、ルクシエルの冴えた声音が呼び覚ました。

「あ、ああ……ルクシエル」

ハルシオンは席を立った。

「とりあえず今夜の夜警は君が作った区分け表を元を実施して欲しい。私はこれから教会へ行って、アルファージ司祭長に会って来る」

ルクシエルの青い瞳が鋭く光った。

その眼差しは執務机の上に広げられた地図へと向けられている。

「では、司祭長のお話を聞いてこられるのですね？」

「ああ、そのつもりだ。アルファージも話したいことがあると連絡してきたし。彼から何か有意義な情報が得られたらいいのだけれど」

ハルシオンは不意に口をつぐんだ。

「どうされました？」

「いや、二日前の晩に、吸血鬼に襲われていた旅の神官を助けたのだが、彼は諸国を巡って吸血鬼の伝承を集めているため、ここアルビオンに立ち寄ったと言っていた。その神官がまだ教会に滞在していれば、話を聞けるかと思っただけだ」

「そうですか。しかし、珍しい人もいるもんですね。吸血鬼の伝承を収集だなんて」

冷たく半ば嘲笑うように呟くルクシエルにハルシオンも内心は同感だった。

無意識のうちに首から下げた白金の十字架を右手で握りしめる。

「じゃ、何かあったら教会まで伝令を寄越してくれ。話が終り次第、営舎に戻りたいが……」

ハルシオンは再び口籠った。

あの司祭長は人付き合いに垣根を作らない。誰とでも障り無く接する度量の深い人間だ。

仕事振りはいい加減だという噂も聞くが、少なくとも彼の信奉する神々の教えの一つ、隣人を愛する心だけは誰にも引けをとらない。

つまり、客をもてなすのが大層好きなのだ。彼は。

日々を祈りと信仰に捧げる禁欲的で単調な司祭の暮らしは、彼に合っていないのだとハルシオンは密かに思う。

流石に面と向かって言った事はないが。

「アルファージ司祭長の話は長くてね。いつの間にか、話題がわき道に逸れてしまって、どんどん関係ない話へと発展してしまうんだ。悪いが、私は今夜夜警に出られないかもしれない」

ルクシエルは冷やかに微笑みながらうなずいた。

「司祭長のことは存じてます。来客一人一人に酒を勧める困った方ですが、こちらは私が留守居を勤めますのでお任せ下さい」

「すまない」

「いえ。騎士長にも気晴らしが必要です」

ルクシエルは腰に吊るした白銀の銃に手を当てた。

副騎士長である彼は、騎士団でも十指に入る射撃の名手だ。

特に早撃ちにかけては隣に並び立つものはいない。

――気晴らし、ね。

ずっと部屋で書類とにらめっこするより、生きている人間との会話の方が得るものが多いとルクシエルは言いたいのか

。

「じゃ、後を頼みます」

「はい」

ルクシエルに見送られてハルシオンは執務室を後にした。

「どこに行くの？」

騎士団営舎から外に出た時だった。

白い外套と首の後ろで纏めた長い白金の髪を靡かせハルシオンは振り返った。

そこには頬を不満げに膨らませ、蜂蜜色の髪を頭上で高く一つに束ねたアナーシアが立っている。

また近衛兵隊長を剣の稽古に付き合わせたのだろう。

アナーシアは動きやすいズボンとブーツ姿だ。

「ちょっと私用があって、教会へ行ってきました。アナーシア様」

「教会……？」

アナーシアが意外そうに小首を傾げる。

それでは、と暇を告げて踵を返すと、ぱたぱたと追いかけてくる足音。

ぐい、と髪を掴まれてハルシオンは足を止めた。

まだ何があるというのですか？

渋々振り返ると、アナーシアがハルシオンの腰まで伸びた白金の髪の束を右手で握りしめて、真っ直ぐな瞳でこちらを見上げている。

ハルシオンはため息を漏らした。

「アナーシア様……髪を引っ張るのはやめてもらえませんか？」

にっとアナーシアが不敵ともいえる笑みを浮かべる。

「だったら切れればいいわ。長いから掴んでしまうんですもの」

「……」

ハルシオンは瞳を細めた。

アナーシアが絡んでくるのは現状に不満があるからだ。

「頼まれても外へお連れする事はできませんから。女王陛下のご命令で」

「そっ、それはハルシオン、あなたのせいでしょ！ あなたが、あなたがお母様に告げ口したせいで、私は一ヶ月もこの城の中から外に出られないのよ？」

誰かこの姫の首に縄をつけて、外を出歩かないようにしてくれないだろうか。

「臣下として当然の義務です。アナーシア様の身に何かあれば、陛下に怒られるのは私です」

「なんでそう頭っから、私の身に何かあるかもしれないって、決め付けるのよ！」

ぐいっと、アナーシアがハルシオンの髪を更に引っ張る。

「危ないのはあなたの方じゃない！ いくらあなたが『輝ける栄光(shining glory)』を扱えるからって、いつも無事であるとは限らないのよ？ もしも、もしもその十字架の力が発動しなかったら、ハルシオンだって普通の人間と同じだわ。そうでしょ？」

「……それは、そうですが……」

アナーシアはまだハルシオンの髪を両手で握り締めている。

珍しくこの勝気な姫が少女らしく気弱げに見えた。

同時に自分の身を誰よりも案じてくれていることも。

「アナーシア様、ありがとうございます。ですが、私も銀光騎士団の騎士長という身分を賜った身。もしもに備えて予備の武器は持っております。ですから、あなたのご同行は不要です」

「……」

アナーシアの胸の内をずばり言っただけだと、彼女は黙ったままハルシオンの髪から手を離れた。

小さく舌を出してハルシオンを見上げる。

「やっぱり、駄目？」

ハルシオンは首を横に振った。

「以前にも申し上げましたが、私には私の、姫には姫の務めというのがあります。姫は城にて陛下を支え、私が助けを求めましたら速やかに援軍を配備できるようお願い申し上げます」

ハルシオンはアナーシアへ腰を折り頭を垂れた。

彼女はもう幼い子供ではない。

だからこそハルシオンも敬意を表して臣下の態度で彼女と接する。

それをどこか寂しげな瞳でアナーシアは見つめていた。

おずおずと口を開く。

「わかったわ。ここが、私が今いなくてはならない場所だというのね」

「姫ならご理解していただけると信じていました」

「.....仕方ないわね。でも、ハルシオン」

アナーシアは再び真っ直ぐな瞳でハルシオンを見つめた。

「帰ってきたらお願いがあるの」

「お願い、ですか？」

どうせ言われる事は無理難題ではなかろうか。

「うん」

「それは何ですか？」

アナーシアはくるりとハルシオンに背を向けた。

「今は言えないわ。じゃ、気をつけてね」

アナーシアははにかんだように微笑すると、蜂蜜色の髪を馬の尻尾のように揺らしながら、城に向かってレンガを埋め込んだ道を駆けて行った。

「.....」

その場に立ち尽くしたハルシオンは、アナーシアの『お願い』とは一体なんだろうかと考えた。

考えれば考える程、悪い想像しか浮かばない。

彼女は城から外に出ることを禁じられている。

だから、またこっそり自分を連れていけだとか、ひょっとしたら、城下での買い物を頼むつもりなのかもしれない。

「やれやれ.....」

ハルシオンは再びため息をつきながら、教会へ向かうべく城門へと歩き出した。

◇◇◇

ハルシオンは教会へ行く前に城下の市場で買い物をした。

丁度南部からやってきた行商人がいて、海がないアルピヨンでは滅多に食べられない、魚の干物を売っているのをみかけたのだ。

ハマージという白身魚だが、香辛料と独特のたれに漬け込まれているせいで、その身は淡い紅色をしている。

これが酒の肴に丁度いいとアルファージが言っていたので、ハルシオンは土産として買い求めた。

町のある教会まで歩くと、辺りはすっかり日が落ちて薄暗くなっている。けれど町を囲む城壁の上では、暗闇を払う松明の火が煌々と燃えていた。

五つの尖塔を持つ教会は、日暮れというせいもあって人通りもなく寂しい。

ハルシオンは日が落ちてからはいつも通り教会の裏手に回り、通用口の扉を叩いた。

扉の上部にある覗き窓が開き、橙色の光が溢れ出た。

「ハルシオン、待ってたぜ」

がちゃりと錠を外す音がしたかと思うと、通用門の木の扉がゆっくりと開かれた。

そこにはランプを片手に持った黒い司祭服のアルファージが立っている。

心なしか顔色が青白く、目の下には隈ができていような気がするのはいのせいだろうか。

「アルファージ。あなたにお聞きしたい事があってお邪魔しました」

アルファージは普段と同じように唇を歪め微笑した。

「ま、兎に角中に入れ。話なら酒でも飲みながらゆっくりとすればいい」

問題はまさにそれなのだが。

話より酒の方がすすむとハルシオンが教会を訪ねた意味がない。

けれどめざといアルファージは、ハルシオンが携えている茶色の紙包みに気付いた。

「ひょっとして、それは酒の肴じゃないか？」

ハルシオンは中に入ると扉を閉めた。

アルファージがポケットに入れた鍵を取り出し再び施錠する。

「あなたの好きなハマージの漬魚です。行商人が来ていたので、思わず買い求めてしまいました……」

「いや、うれしいぞ、ハルシオン。覚えていてくれたんだな」

「……」

ハルシオンは黙ったまま廊下を歩き続けた。

三年前、ハルシオンは少しの間だがアルファージが管理するこの教会で寝起きしていた。

アルピオンが吸血鬼の集団に襲われたあの事件で、ハルシオンの一家は全員彼らに殺されていたからだ。

ハルシオンの両親は信心深く、週末には欠かさずこの教会を訪れていて、アルファージとも面識があった。

そのおかげかどうかは知らないが、天涯孤独となったハルシオンの身を案じてか、アルファージがいろいろと世話を焼いてくれたのだ。

お陰でハルシオンは本当に孤独にならなくて済んだ。少なくとも、誰もいない家に帰らなくて済んだ。

今ならそう思える。

「お前と飲むのは久しぶりだな」

心持ち楽しそうなアルファージの声。

ハルシオンは過去の出来事から現実へと意識を戻した。

「アルファージ。その前に、私の話を――」

「わかってるって。まあ、せかすな。夜は長いし、そうそう。ノムリス神官もまだここに滞在している。吸血鬼について知りたいならもってこいの人間だぞ」

アルファージは居室の扉を開いた。

中では暖炉の赤々とした火が周囲を照らしていた。絨毯が敷かれた床は暖かそうで、暖炉の前に置かれた安楽椅子に銀髪の神官――ノムリスが腰を下ろし、足元には司書室から持ち出したのであろう、埃っぽい古めかしい書物が十冊ほど積まれている。

話し声に気付いてノムリスが顔を上げた。

眼鏡の縁に手をやり、ハルシオンの姿を見ると椅子から立ち上がった。

「これはハルシオン様。先日は危ない所を助けていただき、ありがとうございました」

差し出された右手を渋々ハルシオンは取り握手を交わした。

「いえ。私は自分の役目を果たしただけですから」

「どうぞおかけ下さい」

ノムリスが暖炉のそばに用意してあった肘掛椅子をハルシオンにすすめた。

「俺は厨房で酒と肴の用意をしてくる。ノムリス神官、その間、ハルシオンに吸血鬼の面白い話でもしてやってくれないか」

ノムリスの薄紫色の瞳が眼鏡の奥で微笑した。

「わかりました。私が知っていることならなんでもお話いたします。さ、まずは外套を脱いでおかけ下さい」

ハルシオンは外套を脱いで居室の壁際にあるマント掛けにそれをひっかけた。

ハルシオンはもしもアルファージの話が短時間で済むのなら、その後夜警に出るつもりなので、白い騎士団の制服を纏っている。

アナーシアにも言ったが、丸腰ではない。

腰のベルトには六連発の銃と銀を詰めた弾丸の入った入れ物を吊っている。

ハルシオンはそれは外さず、ノムリスに勧められた肘掛け椅子へと腰を下ろした。

暖炉を囲むように後一脚、椅子が置かれている。

その椅子の前には小さな円卓があり、幾何学模様が彫られた硝子の杯と黒い酒の瓶が載っている。

「実は先に一人ちびちびとやらせていただいていたんです」

ハルシオンの視線が酒と杯に向いたことに気付いたノムリスが口を開いた。

杯は三つ用意されている。

ノムリスの白い指が酒瓶を掴んだ。

「これは南方アギスで作られた薬酒です。まずはこれで体を温めてください。疲労回復、滋養強壮、精力増進……などなど、体に良いものですからぜひ」

ノムリスは細長い酒瓶の栓を開け、硝子の小さな杯へと注いだ。

暖炉の光のせいだろうか。それは葡萄酒のように赤く見えたのだが、それよりもずっと暗い色をしている。

「さ、どうぞ。ハルシオン様」

杯をノムリスが差し出した。

一口で飲めてしまう微々たる量だ。薬酒は一度に沢山飲むのが目的ではない。

毎日欠かさず続けることで、その効力が出るというもの。

「ありがとうございます」

ハルシオンは硝子の杯を手にした。

やはりその酒は暗褐色をしていたが、薬酒独特の匂いはない。寧ろ熟れた果実を思わせる甘い香りがする。

ハルシオンは杯を持ち上げ口に含んだ。

ややとろみがかかった液体が喉の奥に流れる。

香りから連想するよりもずっと濃厚な甘みが口の中に残った。

酒というよりも果汁のような気がする。

ハルシオンは息をついて杯を円卓へ戻した。

「僅かな量でも効くのですよ。数分もすれば、手先の方までぼかぼかと体が温かくなってきますから」

ノムリスがハルシオンの顔を覗き込むように微笑した。

「……神官殿は、いつもこれを？」

ハルシオンの問いにノムリスが頷いた。

「ええ。なんせ私は旅の神官ですから。よく歩いた日はてきめん足にきます。それに、寝酒にも良いのです」

「……」

ハルシオンはノムリスが言っていたように、はや頬が火照ってくるのを感じた。

指先にも暖炉の熱よりも体の中からの熱の方が熱い事に気付いた。

思わず右手をあげて額を拭う。

じっとりとした汗をかいている。

「ほら、私の言った通りでしょう。この酒は体を早く温めて、心地よい眠りへと誘ってくれるのです——」

ハルシオンは無意識のうちに右肘を椅子の肘掛に置き、下がりつつある頭をそれで支えていることに気付いた。

隣の安楽椅子に腰掛けていたはずのノムリスが、いつの間にか目の前に立っていた。

「いい夢をご覧になることです」

そう言ったノムリスの声が四方八方から鐘の音のように鳴り響いて聞こえる。

「——何を、飲ませたんです？」

脈が速くなり、それに合わせて呼吸も浅くなるのがわかる。

ハルシオンは立ち上がろうとした。だが視界は霞のように白く暖炉の炎のように揺らいで平衡感覚が保てない。「ご安心下さい。毒ではない」　ハルシオンはよろめきながら、ノムリスを手で押しやり、居室の外に出ようと扉へ歩いた。

体の火照りは酷くなる一方で、口の中が乾き喉の渴きを感じる。

夢中で体を動かし前に進もうとすると、霞の中で居室の扉が開いた——ような気がした。

黒髪の黒い司祭服を纏った男が目の前に立っている。

「アル、ファージ……」

ハルシオンはアルファージに向かって手を伸ばした。

柔らかな生地の手触り。間違いなく目の前にいるのはアルファージのはず。

司祭服の裾を掴んだまま、ハルシオンはその足元に倒れ意識を失った。

【5】 失われし記憶

「ちょっとルクシエル！ これは一体どういうことよ」

「どういうことかと仰られても姫様——」

ルクシエルは眉根を寄せた。

一方アナーシアは、いらいらと銀光騎士団の営舎の二階にあるハルシオンの執務室を歩き回っている。

機嫌が悪そうに蜂蜜色の髪が背中で揺れた。

「ハルシオンがまだ帰ってこないなんて、絶対におかし——い！！」

アナーシアが体全体で怒りを爆発させている。

「あなただってそう思うでしょ！？ 教会に行ったのは昨日の夕方よ？ 今日だってもう日が暮れてきたというのに、なんでハルシオンが帰ってこないわけ？ 無断で城を空けるなんて職務怠慢よ！」

今にも食って掛かりそうな勢いのアナーシアを、ルクシエルは苦笑いでなんとか押さえ込もうとする。

こういってはなんだが、ハルシオンは騎士長に任命されて以来この三年、私用で休みをとった日は僅か二日しかないのだ。

そんな彼のことをルクシエルは職務怠慢だとは思わない。

寧ろ、騎士長であるハルシオンが休みをとってくれないと、部下である自分も休暇の申請がしづらいのが本音だ。

「しかしですね、姫様。アルファージ司祭長につかまったら、一晚中酒を飲まされてしまうのは確実です。それにこの時間ですから……騎士長は教会を出た足で夜警に出してしまわれて、多分、朝方帰ってくるのではないのでしょうか」

「ないでしょうかって——ルクシエル、それはあなたの憶測でしょう！？ あなた、そんないい加減な仕事してるんなら私が容赦しないわよ！」

アナーシアの苛立ちはルクシエルと会話すればするほど高まっていく。

しまった。地雷を踏んだか。

ルクシエルは額に汗を浮かべながら慌てて首を振った。

「い、いいえ。憶測ではありません、アナーシア様。騎士長の帰りが遅いので、ちゃんと教会に使いを出しました」

「それで？」

「やはり騎士長はアルファージ司祭長に酒を付き合わされて、まだ部屋でお休みにいられていると」

「それはいつのこと？」

「今日の昼すぎです」

「で、ハルシオンはいつ帰ってくるの？」

ルクシエルは目眩を感じながら額に手を当てた。

この姫とまともにやりあえるのはハルシオンしかいない。

「ですから、先程申し上げたように、騎士長の性格からして、そのまま夜警に行かれるのが当然かと思われます」

「……」

アナーシアが黙り込んで再び執務室の中を歩き回り始めた。

「……」

「あの、姫様」

呼びかけると剣呑とした目でアナーシアが睨んでくる。

「い、いえ。なんでもありません」

ルクシエルは即座にアナーシアから目を逸らした。

目を逸らせながらさりげなく窓の外をうかがう。

白金（プラチナ）の髪に『輝ける栄光』——銀光騎士団そのものを象徴するような外見のハルシオンが、城門を今にもくぐってこないか——救いを求めるようにその姿を探す。

「今までこんなこと、なかったわ」

沈黙が訪れた室内で、アナーシアがぼつりと漏らした。

それがあまりにもか細い声だったので、ルクシエルは耳を疑った。

部屋の中ほどで立ち止まったアナーシアは両手を前で組み、やや顔を俯かせ目を伏せていた。

「ハルシオンだから大丈夫。そう、わかっているけど――でも、何かあったらどうしよう。ルクシエル」

「――アナーシア様」

いつも勝気な姫が静かにしてくれるのはありがたい。できればいつもそうであればいいのだが。

けれどそんなアナーシアの様子をみながら、ルクシエルもふと内心不安が過ぎるのを感じた。

実はアルビオン女王の家系は、近い先の未来を見通す『先見』の力を持って生まれてくるのだ。

しかもその力は女性のみにも現れるので、代々アルビオンの王位は女性が継ぐ事になっている。現女王の力は言うに及ばず、アナーシアも当然その力を持っているという。

「姫様、ひょっとして、不吉なものでもお感じになられたのですか？」

「.....わからない」

アナーシアがのろのろと顔を上げる。

透き通った青灰色の瞳は戸惑うようにルクシエルを見上げている。

「そこまではっきりとはわからないけど、ハルシオンのことを考えていたら息が止まって、目眩がするくらい胸がどきどきして、たまらなくイライラしてくるの！」

「.....」

「ルクシエル、私どこがおかしい？」

「――姫様。息が止まったらもう死んでますよ」

さらりとルクシエルは突っ込んだ。アナーシアの青くなった顔が一気に怒りで赤くなる。

構わずルクシエルは言葉を続けた。

「ついでに申し上げますと、姫様はおかしくはありません。どうして息がとまりそうなほど目眩がするほど胸がどきどきして、イライラするのは、世間一般的な言い方をすれば、姫様が騎士長に恐らく恋しておられるからでしょう」

「――え？」

アナーシアが声にならない声を漏らし、両目を見開いた。

「一つご忠告すれば、騎士長は鈍いので、はっきり言わないとわかりませんよ？」

「.....」

なんともわかりやすい反応だ。

ルクシエルは内心笑いを堪えながら、表情を驚愕に凍りつかせたアナーシアの肩に手を置いた。

「まあそれは置いときまして、私も騎士長がいつ教会を出たのかが知りたいので、これから伝令を出して確かめます。三十分もあればご報告できると思いますので、姫様は一旦お部屋にお戻り下さい」

「でも――」

絶るような眼差しを向けられてもルクシエルは表情を変えずただ首を横に振る。

「.....わかったわ」

アナーシアは仕方なく、ルクシエルに誘われるまま、執務室の扉から外へ出た。

執務室の前に待機している団員にアナーシアを部屋まで送るように言いつけてから、ルクシエルは営舎の一階へと階段を下りた。

営舎の一階は待機している騎士達の詰所である。

ルクシエルはそこにいた一人の少年騎士を呼び寄せた。

「教会へもう一度伝令に走ってくれ。騎士長がもう教会を出たかどうか、直接アルファージ司祭長に問い合わせろ。それを確認して三十分.....いや、二十分以内に城まで戻って来い。いいな？」

ルクシエルは営舎の前でじっと待った。

ハルシオンが夜警を終えた騎士達を毎朝そこで待つように。

やがて日が暮れ周囲が夜の衣を纏い始めた頃――息を切らせた少年騎士がルクシエルの所へと戻ってきた。

「――どうだったか？」

「副騎士長.....それが、何度教会の通用扉を叩いても、誰も出てこないのです」

「なんだと？」

ルクシエルは眉をひそめた。

これはアナーシアの悪い予感が当たったのだろうか。

「でも、諦めて帰ろうとした時、扉の覗き窓が開いて、見知らぬ若い司祭が出てきました。目の色は紫でした。アルファージ司祭長への面会を求めましたが、司祭長は留守でいないと言われました。仕方がないので、その司祭にハルシオン様はもう教会を出られたかききました」

「それで？」

少年騎士は俯き首を横に振った。

「僕と入れ違いぐらいで教会を出たと言われました」

「ふむ――よし、わかった。ご苦労だった。行っていいぞ」

「はっ」

少年騎士は営舎の中へ駆け足で入っていった。

その小柄な背中を見ながら、ルクシエルは右手を顎に沿え一人唸った。

アナーシアへこの事を報告すると約束したから行かなくてはならないが、正直気は重い。

いつもと違う教会の様子が気になるからだ。

それはきっとアナーシアも不審に思うに違いない。

「ルクシエル」

誰もいないはずなのに、呼びかけられルクシエルは身を強張らせた。

背後にはいつの間にかアナーシアが立っていたのだ。

「三十分後に来るって行ってたから、実は外で待ってたの」

「これはこれは姫様――これからお部屋へうかがおうかと思って――」

「だからさっきの伝令の報告も聞いたわ」

ルクシエルは内心舌打ちした。

誰がどう聞いても伝令と対応した見知らぬ司祭という存在が怪しいと思うではないか。

「ルクシエル。私、自分の目でハルシオンが無事か確かめたい」

先見の力の影響もあるのだろうか。

アナーシアは自分がハルシオンに感じているのは『恋』のせいじゃないからと前置きして訴えた。

「でも姫様は城から外に出られることを陛下に禁じられておいでです」

「そんなのわかってるわ。要は『姫』が城にいればいいんでしょ？」

アナーシアの顔によぎった不敵な笑み。

「まさか、姫様――」

嫌な予感がする。ルクシエルに先見の才はないが、この姫が何かよからぬことを考えていることはわかる。

半年分の給料に値するアルビヨン金貨一枚賭けてもいい。

「そう。ちゃんと部屋に『姫』はいるから。ルクシエル、悪いけど制服を貸してくれるかしら。これから教会へ乗り込むわよ」

ぷっとルクシエルは吹き出した。

なるほど、そういうことか。

「わかりました。では先に二階の私の執務室へ行って下さい。制服をお持ちします。ちなみにうかがいたいのですが、城から出られない不幸な『姫君』は一体誰なのですか？」

アナーシアはにこやかに微笑んだ。

それこそこちらもつつりこまれてしまうような、愛くるしい満面の輝くような麗しい微笑みで。

「決まってるじゃない。私のことを一番良く知っている――従者のエルムよ」

一方、王城内のアナーシアの部屋では――。

『絶対無理。こんなのすぐばれるに決まってる！』

『大丈夫よー。お腹が痛いとかなんとか言っとくから、寝台に入って布団にくるまってなさいよ』

アナーシアの身代わりにされたエルムは、彼女の部屋で頭からすっぽりと布団に包まり震えていた。

念のためと、金色のカツラと彼女の白い夜着を着てはいるが、布団をはぎとられたら偽者だとばれるのは目に見える。

『姫様……無茶苦茶ですよ……というか、早く帰ってきて下さいー！』

不幸な従者は、主人であるアナーシアの耳に絶対に届かないと知りつつ、それを切に願うのであった。



頭が酷く痛む。鈍器で殴られたように。

それに加えて思考がまとまらない。いや、考える事自体億劫だ。

できればこのまま眠っていたい――。

「目を覚ましたようだ」

――アルファージ？

ハルシオンは目を細めた。卓上に置かれた燭台のろうそくの炎が事の他眩しく感じられた。

「……っ」

頭を上げようとしたが重い。鈍痛がひっきりなしにこめかみを圧迫する。

まだ視界はうっすらとした霧がかかるように煙っている。

ハルシオンは朧げな意識の中、自分の置かれた状況を確認しようとした。

頭以外に痛みはない。手先と足先は動く。だが、立ち上がれない。

力が入らないというのもあるが、何かに体を固定されているようだ。

どうやら椅子に縄で縛られているらしい。

状況に戸惑いつつも試しに後ろ手に回された両手に力を入れてみるが、巻きついている縄は緩む気配がない。

「私は、一体……」

「――悪いな、ハルシオン。実はお前にききたいことがあるんだ」

遠くから声が響く。けれどその声の主は膝をついてハルシオンの顔を覗き込んでいた。

癖のある肩まで伸びた黒髪。人懐こそうな穏やかな青い瞳は、心労のせいか落ち窪み黒い隈が浮いている。

「アルファージ。一体、これはどういうことなんだ？」

かさついた唇を動かすと、ハルシオンは顔を覗き込むアルファージの胸元に見知った十字架が揺れているのを見た。

銀よりも眩い光を放つそれは、『輝ける栄光(shining glory)』に間違いない。

ろうそくの暗い光に十字架の中心に嵌め込まれた宝石が、問いかけるようにきらりと紅に輝く。

ハルシオンの曖昧だった意識は一気に目覚めた。

「それは、私のだ！ 返せ、アルファージ！」

「わかっている。わかっているよハルシオン。用が済んだらお前にこれは必ず返す」

アルファージの右手が上がり、彼は幼い子供をなだめるようにハルシオンの頭を撫でた。穏やかな口調とは裏腹に、その顔は酷く焦燥感に満ちていた。

「すみませんね。私も手荒な真似はしたくないので、ちょっと強引でしたけど、薬を使わせてもらいました」

部屋の暗がりから二つの赤い瞳が瞬いた。

その眼差しにハルシオンは見覚えがあった。

ノムリスだ。 ゆらりとした歩調でノムリスが歩いてきた。

場所を譲るようにアルファージが後へ下がる。

ハルシオンは近づいてきたノムリスを一瞥して確信した。

相変わらず旅の神官を装っているが、目の前にいるその正体は吸血鬼――。

彼の気配は夜気のように静か。纏う気は月光のように高貴。大理石のように染み一つない青白い肌。蠟燭の光を受けて輝く銀髪――。

ハルシオンは息を詰めてノムリスを凝視していた。

肌で感じる。彼は低級な吸血鬼ではなく、真正の『吸血鬼』であることを。

「流石だね。私は何者であるか察したようだ。でも、『輝ける栄光(shining glory)』の騎士である君の前で正体を隠すのは、ちょっと骨が折れたな」

目の前にいるノムリスは、先日ハルシオンが助けたお調子者の神官ではない。眼光の鋭さを隠すための眼鏡はかけておらず、元より口調自体が変わっている。

そこには人間よりも自らの方が優れていると自負する別の生き物がいた。

鋭い紅の瞳が瞬いた。整った造りの顔立ちが僅かに申し訳なさそうに一曇る。

「君をこんな目にあわせてすまないと思う。だが、君にどうしてもききたいことがあってね」

「……」

ハルシオンはノムリスの声を無視して素早く視線を周囲に向けた。

ここはアルファージの居室ではないようだ。

空気がひんやりしているので恐らく教会にいくつかある地下の小部屋だろう。

この教会は七百年前に建設され、増改築を繰り返している。どこにどんな部屋があるのか、俺にもわからんのだとアルファージが冗談（いや、おそらく本当だろう）交じりに言っていた。

明かりはハルシオンの前に置かれた円卓の上にある燭台のみ。

それがゆらゆらと揺れる光の中で、黄土色をした土壁と壁をくりぬいたような横穴がいくつも見える。

ここは地下墳墓か――。

大昔に埋葬された死者が眠る棺の影が見える。

「私が聞きたいのは、君がどこで『輝ける栄光(shining glory)』を見つけたか、だ」

「……」

ハルシオンは沈黙を保った。

その沈黙を良しとせず、ノムリスが唇を歪めた。

「君は覚えていないらしい。でも、それは意識の表面に上っていないだけだ。君は知っている。意識の深層にその記憶を封じ込めているだけなのだ」

ノムリスの紅い瞳がハルシオンの瞳を射るように見た。

途端、頭を横殴りにされるような強い衝撃を感じた。

ノムリスの思念だろうか。ハルシオンは思わず目を閉じ項垂れた。

やはり彼は並大抵の『吸血鬼』ではない。

俯くハルシオンへノムリスが語りかけるように呟いた。

「薬で眠ってくれている間、君の意識から感じたのはこの場所だった。だが、残念ながらここまでしかわからない」
ノムリスの右手が上がり、白い指がハルシオンの顎を静かに持ち上げる。

吸血鬼の体に流れる血は冷たいのだろうか。

氷の手で触れられたようでハルシオンは唇を震わせた。

力を入れてノムリスの手を振り払う。

飲まされた薬の影響か、ノムリスの発する吸血鬼の気の力か。それだけの動きで目眩がして体力の消耗を感じる。

「そう。抵抗するということは、君がその『記憶』を覚えていると認めるようなものだ。ハルシオン」

「……こんなことは、時間の無駄だ」

息を吐き出しながらハルシオンはノムリスの後に佇むアルファージへ視線を向けた。

正確には彼の首に掛かっている白金の十字架だ。

あれがあれば、ノムリスを滅する事ができる。

「無駄ではないさ。『輝ける栄光(shining glory)』を見つけることは、私の探している『黒き聖母・グロリア』を見つけることと等しいのだから」

ノムリスはそういいながら、やおら、後に佇むアルファージの隣へ並び、親しげな友人のような態度で彼の肩に腕を回した。

紅の瞳がハルシオンの考えを見透かすように、その胸で揺れる白金の十字架へと注がれる。

「そう――これが君の手に渡ると厄介だな。『輝ける栄光』の力が発動したら私も瞬時に灰となるだろう。つまり、ハルシオン。これを首から下げているアルファージは“まだ”吸血鬼になっていないと理解できるな？」

びくりとアルファージが体を震わせた。

アルファージの肩を掴むノムリスの指の関節がくっきりと浮かび上がっている。

「やめてくれノムリス。俺は、まだ……」

アルファージの喉がかすれた声を上げた。

「何をする気だ！」

ハルシオンはあらん限りの声で叫んだ。

後ろ手で椅子に体を縛られていて身動きできないのがもどかしい。

「ハルシオン。アルファージはまだ“生きている”し、“人間”だ」

これがどういう意味かわかるか？

ハルシオンは脳裏に直接ノムリスの声が響くのを感じた。

「助けてくれハルシオン！　なんか、なんか覚えてないのか！？　俺は吸血鬼に血を吸われて死ぬなんてごめんだ！」

自制のたがが外れたのか、突如アルファージが黒髪を振り乱して発狂じみた声を上げた。

「嫌だ。俺は、人間でいたいんだよ。頼む、ハルシオン。黒き聖母グロリアの居場所を教えてください！！」

——グロリア？

「……グロリア？」

頭痛が酷くなってきた。目の前の蠟燭の暗い光だけでもちかちかして目を開けているのが辛い。

「君がグロリアが眠る場所に行ったことは、『輝ける栄光(shining glory)』を持っていることから明らかだ。この十字架は彼女の胸につきたてられていたのだから。そして彼女はこの教会の何処かで眠っている。君の意識を辿って、我々はこの地下墳墓へ来た」

「私は……知らない……グロリア……誰だそれは——」

けれど何故だ。

その名前を聞くたびに、胸の奥が疼くように痛むのは。

私は本当に、知らないのか？

「ハルシオン！」

自らの心に問いかけながら、アルファージの怯えた声でハルシオンは顔を上げた。

冷水を被ったように冷たい汗が額から流れ落ちる。

ノムリスの手はアルファージの右のこめかみを掴み、頭が動かないようにしっかりと固定している。

司祭服の黒い襟から覗く首筋へ、ノムリスが顔を寄せるのが見える。

「……やめろ」

ノムリスの赤い瞳が勝ち誇ったようにハルシオンを見つめている。

「ではグロリアの居場所へ案内してもらおう」

「——それは、できない。覚えてないんだ！」

嘘ではない。

少なくともハルシオンは『輝ける栄光(shining glory)』をどうやって手に入れたのか思い出すことができない。

アルファージの首を捕まえたままノムリスが凍える声で呟いた。

「ならば——思い出してもらおうしかなさそうだな」

ノムリスは再びこちらの意識を操るような、強烈な視線をハルシオンへと向けた。

その視線から彼が、苛立ちをぎりぎりの理性で抑えているのがわかる。

「アルファージの話によると、君の家族は三年前、アルビオンを襲った吸血鬼の一団に殺された。全員……こんな風に」

それは一瞬の出来事だった。

ノムリスは果実をほおばるように、アルファージの首筋を引き寄せると長く伸びた犬歯を埋めた。

「やめろ！！　ノムリス！」

「ぐあっ！」

血を吸われるアルファージの顔が苦悶に歪んだ。宙を見上げる目の光が消え失せ、顔色がどんどん青ざめて土気色になっていく。

握りしめた両手の拳がぶるぶると震えていたが、やがてそれが唐突に動かなくなった。

「アルファージ！！」

ハルシオンの声だけが、地下墳墓の闇の中で虚しく響き渡る。

「……」

ノムリスは動かないアルファージの体から無造作に手を離し地面へと投げ捨てた。

足元に倒れたアルファージの体をまたいで、ノムリスが静かにこちらへ歩いてくる。

けれど次の瞬間、ノムリスはハルシオンの背後に回っていた。

一呼吸する間もなく。

ひやりとした指が喉元にかかる。

ハルシオンは息を詰めた。

触れるノムリスの冷たい指先が、長く伸びた爪が肉に食い込む感覚が、忘れていた『何か』を思い出させる。

全身の毛が逆立ち、無意識の内に細かな震えが体を走る。

ハルシオンは努めて平静さを保とうとした。けれど意識すればするほど心臓の鼓動は跳ね上がり、呼吸が浅く速くなる

。

「読めなかった君の心が、少しずつ感じられるようになってきた」

「……」

ノムリスの声がずっと近くで――耳元で囁く。

その囁き声で何かの暗示にかかったようだ。指一本動かすこともできず、自分で物事を考えるのがとても億劫だ。

ハルシオンはただ見つめていた。

脳裏に浮かんできたその光景を。

自分の事なのに、他人の身に起きたことのように眺めていた。

【6】 対峙

そう、あれは。

月の光のない、三年前の新月の夜――。

『城へ行け、ハルシオン』

『私も一緒に行きます』

『ならん！ お前は……お前は、銀光騎士団の一員として、一人でも多く民を救い城へ行くのだ』

父の大きな手がハルシオンの肩を掴み、後方へと突き飛ばす。

まだ十七だった少年の体は軽く、民家の石壁へ背中を叩きつけられるように吹き飛んだ。

『たった一人で、家に戻るなんて無茶です……父上！』

うずくまり、顔を上げたその時にハルシオンは銃声をきいた。

先程ハルシオンが立っていた場所に男の吸血鬼が現れ、父に飛び掛ろうとしていた。

だがその体にはすでに六発の銃弾によって風穴が開いていた。

吸血鬼の体は白い灰となって崩れていった。

『父上！』

ふらつきながらハルシオンは立ち上がった。

銀光騎士団の白い外套を翻し、町の方へ駆け出す父の背中が見えた。

それが最後に見た父の姿だった。

射撃を教えてくれたのは父だった。

この春、銀光騎士団の一員にハルシオンも加わり、今夜は父と初めて組んで夜警に出たのだ。

まさか今宵、数多の吸血鬼が町になだれ込んでくるなど、誰が一体想像しただろう。

ハルシオンは父の言葉に逆らって、自分も町の中央に向かい駆けた。

家にいる母と妹のこと。単独で家に向かった父のことが何よりも気がかりだった。

道端には吸血鬼の餌食になった人々が何人も倒れている。

時折くぐもった呻き声が聞こえるのは、吸血鬼に襲われたがかろうじて命があった者だろう。

訪れた下町の通りは不気味なほど静まり返っていた。

吸血鬼に襲われて生きている人間はもう誰もいないのかもしれない。

ハルシオンは息を弾ませながら、右手に銃を握り締め背中を民家の壁に預けた。

そこから必要最小限顔を覗かせ、前方の様子を探る。

共同井戸がある小さな広場で、家に戻るにはここを通らなくてはならない。だがそこにはふらふらと十体を超える吸血鬼達が歩き回っている。

彼らは時折空を見上げるように顔を上げています。月のない夜だというのに、彼らの目だけが暗闇の中赤い光を帯びている。

まるで人間の気配を探るように。

その時ハルシオンは、共同井戸の丸く石積みされた所から少し離れた木樽の陰で、うずくまっている子供がいることに気付いた。路地の外れに置いてあった松明が倒れ、それが燦る熾火の光でちらちらと映し出される姿が見えたのだ。

辛うじて吸血鬼達の方からは、木樽が積み重なっているせいで姿が見えないのだろう。

だが回り込まれたら見つかってしまうのは必然だ。

いや、多くの吸血鬼がうろつくこの場に、いつまでも隠れ続けることは難しいだろう。

子供は恐怖で動けないのか、頭を膝に埋め体を小さく小さく縮こませている。

ハルシオンは右手に握った銃に力を込めた。息を吸って整える。

弾はここにいる吸血鬼達と戦うには十分ある。

そう思った時だった。

背後から物凄い力で後方へと引き寄せられた。

獣を思わせる荒い息遣い。肩に食い込む長い爪。

吸血鬼。

ハルシオンは咄嗟に手を伸ばし振り払おうと試みるが、絡みついたそれはびくともしない。

『しまった』

喉元に骨を砕かれるような耐え難い激痛が走り、ハルシオンは呻いた。

吸血のショックだろうか。体中の血が一気に引いて目眩を起こしたように目の前が暗くなる。

『……くそっ……』

だから父に城へ行けと言われたのだ。

足手纏いになるから、置いて行かれたのだ。

ハルシオンの血を啜る吸血鬼の喉が鳴る。

温かな血潮を求め飢えを満たすその行為を黙って耐えるつもりはない。

ハルシオンは右手に持った銀色の銃を左の脇の下へ回すと、背後から襲い掛かった吸血鬼めがけ、続けざまに六回引き金を引いた。

火薬の熱さと濃い血の匂いが辺り一面に立ち昇る。

押さえつけられていた重圧が取り払われ、絡み付いた吸血鬼の腕を振り落とすと、ハルシオンは井戸の広場へと駆け出した。

こうなっては仕方がない。自分が囷になったことに、あの子供が気付いてくれることを祈るしかない。

走りながら空になった弾倉へ弾を込め直し、ハルシオンに気付いた吸血鬼の頭めがけて引き金を引く。

着弾と同時に吸血鬼の頭が後方へ仰け反る。

けれどハルシオンに気付いた他の吸血鬼達が信じられない速さで追いかけてくる。

吸血鬼となった人間を屠るには心臓へ最低でも三発、銀を詰めた弾丸を撃ち込まなくてはならない。

ハルシオンは三発ずつ連続で発砲した。六発しか込める事ができない銃はあっという間に弾倉が空になる。

二体を倒した所でハルシオンは振り返り、追いかけてくる吸血鬼の数を確認した。

あと四体――？

ハルシオンは息を弾ませながら路地へと逃げ込んだ。それから、どう走ったのかは記憶にない。

曲がり角が多い路地のお陰で追跡を振り切れたのか、ハルシオンはいつしか町の中心にある教会へとたどり着いていた。息切れがして、目眩が酷く立っていられなくなった。

外にいるといつ吸血鬼に襲われるかわからない。よろめきながらハルシオンは開いていた教会の扉をくぐり中に入った。教会の中も闇だった。ろうそくの火は風に吹き消され、濃い蠟の臭いが立ち込めていた。

人の気配は勿論、何かが動くそれも感じられない。

もとい、あと何歩歩く事ができるだろうか。

喉のずきずきする痛みと荒くなる息遣いに戸惑いながら、ハルシオンは首筋から伝い落ちる自らの血に気付いた。弾丸を撃ち続けて熱い銃身の銃をその場で落とし、ハルシオンは震える右手で傷に触れた。

ぬるりとした嫌な感触。吸血鬼に噛まれた傷からの出血が止まらない。

口の中も錆びた鉄の味のするそれが充満している。

このまま死ぬのだろうか。

ふっとそんな考えが脳裏を過ぎった。

ハルシオンは壁に縋りながら、真っ暗な教会の中を歩いていった。

どれくらい壁を伝いながら歩いたことだろう。

どこか部屋らしき――いや天井が高いので礼拝堂かもしれない。前方に十字架を祀った祭壇らしき場所が見える。

「……」

赤や黄色、緑に紫――。十字の形を象った大きなステンドグラスの前にあるそれは、今は輝きが失せた黄金色をしてハルシオンを見下ろしていた。

不意にその十字架が幾重にも揺らいで見えた。

足が震え体を支える事が難しくなり、ハルシオンは壁に背中を預けた。

途端、まるで地面が無くなり落ちていくような落下感を覚えたまま、ハルシオンの意識は途切れた。

「……」

全身の倦怠感と酷い喉の渇きで目が覚めた。

ハルシオンは淡い白金の睫で縁取られた重い瞼を開き、身じろぎした。

目の前には銀髪の紅い目をしたノムリスが、腕組みをして立っている。

「どうやら、探すべき所の目星はついたな。その十字のステンドグラスを象った礼拝堂——あそこがグロリアが眠る場所へ通じる入り口があるとみていいだろう」

「今のは、一体——」

ハルシオンは戸惑っていた。まるで夢のようだが、夢というには感覚が生々すぎて全身に冷たい汗をかいている。吸血鬼に噛まれた感触までもが喉に残っている。

両手を椅子の後ろで縛られていなければ、手を喉に当てて傷の有無を確認しているだろう。

するとくつつとノムリスが低く笑い声を立てた。

「夢ではなく、それは本当に君の身に起きた事だ。ハルシオン。最も、君自身が認めたくないから、この記憶は意識の奥深くに沈められていたのかもしれないがね」

ノムリスが唇を歪めながらハルシオンの顔を覗き込む。

「さて。じゃ、今度はその礼拝堂への道を思い出してもらわなくてはならないな。現在の教会の礼拝堂にあの十字の窓はない」

ハルシオンはかさついた唇を舌で湿らせた。

喉の渇きのせいか、出た声は年寄りのようにひび割れていた。

「そんなこと、わからない。私の意識を先程のぞいたのだろうか？ それでわからなかったのに……いつまで、こんなことを続ける？」

ノムリスが銀の眉を吊り上げた。

「勿論、君が思い出すまでいつまでも、だ。私はどうしても『黒き聖母・グロリア』が必要なのだ。いや——吸血鬼の始祖である、彼女の『血』がな」

ハルシオンは心底疲れを感じて息を吐いた。

もう何日もこうしているような気がする。

「……ならば、もう少し楽な体勢にさせてくれ。思い出そうにも——縛られた手が痛くて敵わない」

「それはできない。君は『輝ける栄光(Shining Glory)』に選ばれた騎士だ」

「では、どうやってあなたを案内すればいい？ 椅子に縛られては身動きできないじゃないか！」

ハルシオンはノムリスを睨みつけながら掠れた声で叫んだ。

あの十字のステンドグラスが施された礼拝堂に心当たりがなくもない。

兎に角この教会は七百年前に建造されてから、増改築を繰り返しているため、秘密の通路やいくつもの小部屋がある。

礼拝堂が大なり小なり、他にも三箇所あることをハルシオンは知っている。

「ふむ。意識下を探るよりも、実際に心当たりの所へ行ってみる方が早いと——そう言うのだな」

「ああ」

ノムリスは瞳を細めた。

「わかった。君の縄を解こう。だが私から逃げられると思わないことだ」

「……」

ハルシオンは黙っていた。吸血鬼は心を読む。

この状況から逃れたいと思う気持ちを隠す事はできないが、それを見透かされるのは実に不快だ。

「別に見透かしてるわけじゃない。我々は静かな夜を好むものでね。仲間内では会話は口ではなく、思念でやりとりをするのだ」

「……」

「おや、今度は本当に黙ってしまった。人間にしては、君は心の自制を保つのが上手いな。お陰で苦勞している」

ノムリスはハルシオンの座る椅子の後ろに回った。懐から短剣を取り出し、それでハルシオンの両手と、椅子に縛り付けている縄を切った。

「……」

ハルシオンはやっと自由になった両手をすり合わせた。

どれくらい椅子に縛り付けられていたかわからないが、両手は白く血の気を失い冷たく強張っている。

「さあ、早く案内してもらおうか。客が来たら厄介だからな」 ノムリスがハルシオンの左腕を掴んだ。

ノムリスに腕を引っ張られるままハルシオンは椅子から立ち上がった。

その時床に倒れてぴくりともしないアルファージの姿が目に入った。

ハルシオンの座っていた椅子から数歩としか離れていない。彼は仰向けに倒れており目は閉じられている。

助けを求めるように、ハルシオンから取り上げた『輝ける栄光(Shining Glory)』を胸の上で握りしめたまま微動だにしない。

けれどアルファージの姿が目に入ったのは一瞬だ。

「ちょっと、待ってくれ……」

急に立ち上がったせいか、歩こうとした時くらりと目眩がした。

膝が沈み周囲の景色が凄い速さで回転する。

「おい、しっかりしろ」

ノムリスがよろめいたハルシオンの体を支えようとした。

だがハルシオンはノムリスの腕に縋りついた。咄嗟に寄りかかる所を求めて彼の腕を掴んだのだ。

体重をノムリスにかけてしまったせいで、二人はもろとも一緒に床の上に倒れた。

「やれやれ……まだ薬が残っているみたいだな。少し休むか——」

ノムリスは後頭部をさすりながら上半身を起こした。

「——！」

目を見開いたノムリスの顔面には、ハルシオンの白い深靴の先端が迫っていた。

ハルシオンの不意の蹴り攻撃を辛うじてノムリスは体を再び床に倒すことでやり過ごす。

けれどハルシオンはそうすることで、自由になった自らの体をアルファージの方へ移動させたのだ。

ハルシオンは『輝ける栄光(Shining Glory)』へ手を伸ばし、それを掴んだ。

瞬く間に右手が眩い白金の光に包まれたかと思うと、それは十字架から白金の銃へと姿を変えた。

「気をつけるのはそっちの方だ、ノムリス」

ハルシオンが床に倒れたままの姿勢で両手で『輝ける栄光』を構えたのと同時に、ノムリスの顔が眼前にあった。

だが彼の手はハルシオンの喉元を猛禽の爪のようにがっちりと押さえつけている。

「君が引き金を引くより、私とその首をへし折る方が早い」

言葉通りノムリスの冷えた指には力が加わりハルシオンの気道を圧迫する。

息ができない。『輝ける栄光(Shining Glory)』を握る手が震えた。

『私を、殺していいのか？ グロリアという女の居場所が、わからなく、なるぞ』

「殺しはしない。君は輝ける栄光を操る騎士だが、所詮はか弱き人間だ……ほら」

ノムリスは右手でハルシオンの喉元を押さえつけながら、左手で『輝ける栄光(Shining Glory)』を握るハルシオンの右手首を掴んだ。

「——！」

みしりと嫌な音がして手首の骨が砕かれたのがわかる。

『輝ける栄光(Shining Glory)』の重みを支える事ができず、ハルシオンの手からそれは無常にも滑り落ちた。

白金の銃はハルシオンの胸の上に落ちて左の脇腹の方へと転がった。

暗く霞む視界の中でノムリスの声だけが響いてくる。

「力で君達人間が我々に敵わない事は知っているだろう？」

——だから、どうだっていうんだ？

「こんな状況で、君はまだ反撃を考えているのか？」

――考えているように、見えるのか？

喉を圧迫されているせいで、そろそろ窒息する方が早い。

殺さないと言っていたが、人間は仰るとおりか弱い生き物なのだ。

「おっと、死なれては困る」

喉を圧迫する圧力が弱くなった。

空気を求めてハルシオンの肺は大きく喘いだ。

「何故頑なに抵抗する？ 私は君を殺す事が目的ではない。ただ、グロリアの眠る場所へ行きただけなのだ」

ハルシオンはまだ荒い呼吸を続けていた。

――グロリア……。

頭が凍ったように麻痺して物事を考えられない。

三年前、吸血鬼に襲われて死にかけた時と同じように――。

けれど自分の中の何かが、思い出そうとする行為を止めようとする。

グロリア。

グロリア。

その名を言わないでくれ。

呼び覚まそうとしないでくれ。

約束、したんだ。

目の前に夜よりも暗くて長い闇色の髪が広がる。

黒曜石と紫水晶で飾られた円環の冠を戴いた、黒いドレス姿の女性。

その瞳の色は吸い込まれそうに深い――黄金。

『私の体を……渡さないで』

「そう――それこそ『彼女』だ！ ハルシオン、思い出せ！」

狂喜するノムリスの声でハルシオンは我に返った。

無言でただ首を横に振る。

思い出したくない。

いや、思い出してはならないのだ。

彼女の事を思い出すのなら、ここで殺された方がましだ。

ハルシオンは目を閉じた。

「私には……命よりも、守らねばならない……約束がある……」

「なんだと？」

喉元に掛かるノムリスの冷たい指に再び力が込められていく。

冷徹な吸血鬼の本性そのものを剥き出しにしたノムリスの顔がハルシオンに近づく。

「ハルシオン、安易に死ぬと思うなよ。こうなれば最後の手段を使ってでも、私はグロリアの居場所を聞き出してみせる」

ハルシオンは首筋に焼けるような熱と痛みを感じた。

思わず閉じた目を見開く。

ノムリスの長く伸びた犬歯が深く喉元に沈みこんでいく感覚が熱い。

頭の中でノムリスの声が冷たく響いた。

『君が死ぬ直前まで血を吸って、その後私の血を与えて君を私の傀儡にしてやろう。そうすれば、私に逆らうことなどはできない』

ハルシオンは動かせる左手で近くに落ちたはずの『輝ける栄光(Shining Glory)』を探った。だが触れることができない。手の届かない所へ滑り落ちてしまったのだろうか。

ノムリスの傀儡になれば、今まで散々自分が倒してきた低級の吸血鬼と化してしまう。

グロリアの居場所はともかく――今まで護ってきた人々に自らが危害を与える存在となってしまう。

それだけは嫌だ。絶対に。

だが焦る気持ちとは裏腹に、意識は眠りに落ちる時のように霞んでいく。

ハルシオンの血を啜るノムリスの喉が一度だけ鳴った。

赤く染まったノムリスの目が驚愕に見開かれる。

『……この血――お前は……まさか！』

ノムリスの動揺を一瞬感じた。その時。

聞き慣れた銃声が地下墳墓の間の中で鳴り響いた。

同時に多くの人間の足音と、ランプの光が幾つも周囲に明るい光の輪を描く。

「吸血鬼！ ハルシオンから離れなさい！」

凜と、はっきりとした口調で言い放たれたその声は、ハルシオンの良く知る少女のもの――。

「姫、お下がり下さい！」

蜂蜜色の髪を揺らす少女を背後に庇い、銀光騎士団の副騎士長であるルクシエルが、両手に持った二丁の白銀の銃の引き金を続けざまに引く。

一つの銃声にはしか聞こえないくらいの早撃ちで放たれたルクシエルの十二発の弾丸は、確かに壁際へと逃れたノムリスを追尾していた。

けれどノムリスは嘲笑うように、壁際からランプの光が届かない遥か天井へと一気に駆け上った。

「どこへ行った！？」

ハルシオンはざわめく騎士達に目もくれず上半身を急いで起こした。

ランプの光に反射する『輝ける栄光(Shining Glory)』を見つけ、拾い上げると左手で握りしめる。

「ばらばらになるな！ 発砲するな！ 同士討ちになるぞ」

弾を急いで込めながらルクシエルが部下の騎士達へ叫ぶ。

「ハルシオン！ 大丈夫！？」

銀の細剣を携えたアナーシアがこちらへ走ってくる。

「姫！ 我々のそばを離れてはなりません！」

ルクシエルの制止の声が飛んだが、アナーシアはハルシオンがいる部屋の奥の方へ構わず駆けて来る。

また無断で拝借してきたのか、白い銀光騎士団の制服を着ている。

だがハルシオンはその背中めがけて天井を駆け下りてくるノムリスの姿を見出していた。

間に合うか。

ハルシオンは気力を振り絞り立ち上がりながら、アナーシアに向かって右手を差し出す。

「ハルシオン！」

アナーシアの瞳は喜色に輝いたが、ハルシオンは天井を睨みつけたまま彼女の体を引き寄せ右腕で横抱きにした。

同時に駆け下りてきたノムリスの手が、アナーシアが先程いた場所で空を搔く。

ハルシオンはアナーシアを抱えたまま地面に伏せ、そのままの体勢で上半身を起き上がらせると、左手に持った『輝ける栄光(Shining Glory)』の引き金を引いた。

地下墳墓の薄闇を白銀の閃光が引き裂いた。

同時にノムリスのものと思しき悲鳴が辺りに響いた。『輝ける栄光(Shining Glory)』の光がノムリスの右腕を肩の付け根から吹き飛ばしたのだ。

『――ハルシオン！ お前は……』

真紅の瞳をぎらつかせ、ノムリスは吹き飛ばされた右の肩を左手で押さえ立っている。

「いたぞ！ あそこだ！」

「撃て！」

その場にいる銀光騎士団十名の銃口が一斉にノムリスへと向けられる。

ノムリスはそちらにはまるで関心を持たない様子で唇を歪めハルシオンを一瞥した。

声には出さずハルシオンだけに思念を送ってきた。

『今日は分が悪い。また改めて君の所へ行こう。君にはまだ、聞きたい事が――』

ノムリスに最後まで喋らせるつもりはなく、ハルシオンは続けて『輝ける栄光(Shining Glory)』の引き金を引いた。

だがノムリスは白銀の閃光を僅かに体を捻るだけで避けると、漆黒の司祭服を翻し、再び周囲の闇に紛れるように姿をくらませた。

「消えたぞ！」

「一体どこに逃げた！？」

ランプを手にした騎士達が自分たちの身長三倍はありそうな、高い地下墳墓の天井を見上げる。

「皆さん――もう、大丈夫です。あの吸血鬼はここには……いません」

ハルシオンは息をつきながら騎士達に呼びかけた。

呼びかけながらも、思い出したかのように地面を見下ろした。

何かが先程からハルシオンの白金の長髪を引っ張っている。

「ハルシオンっ、いつまで腕を載せてるの！ 重い！！」

そこには顔を真っ赤にして地面に倒れて（正確には倒されたまま）のアナーシアがいた。

「す、すみません、アナーシア様……」

ハルシオンが右腕をアナーシアの背中から外すと、彼女は泣いているような怒っているようなどちらともわからぬ形相で体を起こした。

「ハルシオンの馬鹿！ あなた、こんな所で何やってたのよ！」

「……」

アナーシアにどういえばいいだろうか。

戸惑うハルシオンはすぐに言葉を口にすることができなかった。

いや、そもそも何故彼女がここにいるのだ？ しかも銀光騎士団の面々を連れて。

「ハルシオンがなかなか帰ってこないから心配して来たのよ！ やっぱり来て正解だった」

怒りで唇を震わせていたアナーシアの瞳が、驚愕したように細められた。

「咬まれたのね？ いけない、血が出てるわ」

アナーシアは懐を探り白いハンカチを取り出した。

それをハルシオンの首筋へと押し当てる。冷水を浴びたように汗をかいているが、今は鈍い痛みしか感じない。押さえればそのうち血も止まるだろう。

「他に怪我は？」

心配そうな声色になったアナーシアをみながら、ハルシオンはやっと喉から声を絞り出した。

「.....大丈夫です。それより姫、私よりも――アルファージが.....」

ハルシオンは再び目の前が不鮮明になり揺らめくのを感じた。

その不快感を無視して、ハルシオンは前方へ目をこらした。

アルファージが倒れているのはハルシオンが拘束されていた椅子の近く。

今そこには、ルクシエルや他の騎士達が確認をするようにランプを掲げて集まっている。

「アルファージは、私のせいで――」

「ハルシオン！」

ハルシオンはアナーシアの手を振り切り立ち上がった。

白金の十字架に戻した『輝ける栄光(Shining Glory)』が、絡ませていた左手から滑り床へ落ちたが、ハルシオンは構わずアルファージの所へよろめきながら歩いた。

「.....」

仰向けの姿勢でアルファージの体は床に横たえられていた。両手は軽く握られたまま、体に沿う様に置かれている。

顔色は青ざめ瞼は硬く閉ざされている。

黒い司祭服の詰襟は開いていて、喉元には赤黒い二つの咬傷が覗いている。

ハルシオンはそれを呆然と見下ろしていた。

やはり見間違いではなかったのだ。

やはり、アルファージはノムリスの手にかかって死んでしまったのだ。

「ハルシオン様」

ルクシエルが気付いて振り返る。ぱたぱたと足音を立てて駆けてきたのはアナーシアだ。

「ご無事で何よりです」

ルクシエルはハルシオンの様子に目を細め、険しい表情をその冷静な面差しの上に浮かべた。

「アルファージ司祭長は、重傷ですが生きています」

「.....え.....」

ハルシオンはルクシエルの言葉に耳を疑った。

「かなり血を失っておられますが、脈もしっかりしていますし.....それにほら、意識もあります」

「よお、ハルシオン.....、俺もやられたなりに、少しはお前の役にたっただろう？」

土気色の肌の下。黒い瞳をハルシオンに向けたアルファージが弱弱しくも口を開いた。

青ざめた唇に小さな笑みが浮かんでいた。

「アル.....ファージ.....」

ハルシオンはアルファージの枕元へ駆け寄った。膝を付いてその顔を覗き込む。

「俺がお前の足首を引っ張ってやったから、お前、上手い事よろめいて『輝ける栄光(Shining Glory)』を取ることができたんだぜ？」

ああ、椅子から立ち上がった時――。

不意に周囲の景色が急激に揺らいだのだ。立ちくらみを起こしたとばかり思っていたが。

「アルファージ.....あなたって人は本当に――」

頭の中がぐちゃぐちゃになって自分が何を言っているのかも理解できなかったが、一番多かったのは謝罪の言葉では

なかつただろうか。

心の中で軋んでいた重石が外れて、全ての重責から解かれたような気がする。

それを望む資格は今の自分にはないけれど。

けれど今だけ、何もかも忘れて眠ってもいいだろうか。

「……」

ルクシエルが無言で手を伸ばし、ハルシオンのくず折れる上体を背後から支えた。

「ハルシオン、熱があるの。すごい熱よ」

アナーシアが確認するようにハルシオンの額に手を置く。ハルシオンの首の傷を押えた時に気付いていたのだ。

ルクシエルは頷いた。

「わかっています。吸血のショックによるものです。おい、二人を上部屋へ運ぶぞ。皆、手伝ってくれ」

【7】 今ここにいる意味

呼ばれているような気がした。

どうやってここまでたどり着けたのか覚えていないが、ハルシオンは這うようにして祭壇に近づく。

重い体を持ち上げると、そこには硝子の棺が置かれ、黒曜石と紫水晶の円環の冠を戴いた黒いドレスの若い女性が横たわっている。

年頃はハルシオンと同じぐらいだろうか。

緩やかにうねる黒髪はむき出しの肩の上に流れ落ち、抜けるように白い肌の上で唇だけが熟れた林檎のように赤い。

その胸には中央に真紅の宝石が一つだけはめ込まれた、白金の十字架が突き刺さっていた。

ハルシオンはそっと手を伸ばす。

なぜか、それを抜かなければと思ったのだ。

けれど十字架はハルシオンがそれを握りしめただけであっけなく外れた。

だがハルシオンの体力はそこで力尽きる。吸血鬼に喉を咬まれた傷が深く、未だ首からは血が流れ続けていた。

彼女の眠る棺に体を預けるようにして目を閉じた。

辺りは雪の降る夜のようにしんと静まり返っている。

その時、女性の白い頬に影を落としていた黒い瞳が震えた。

肘まで覆う漆黒の手袋をはめた手が棺の縁へと動き、彼女はゆっくりとその身を起き上がらせた。

「私を起こしたのは、あなた？」

頬に優しく誰かの手が添えられる感覚でハルシオンは目を開けた。

深い黄金色の瞳がハルシオンの顔を覗き込んでいる。

「……ええ」

そう答えたつもりだったが、口から出たのは自分の苦しげな息遣いだけだ。

頬に添えられていた彼女の指がハルシオンの顎をなぞり、鮮血が流れ落ちる吸血鬼に受けた咬傷へと伸びる。

焼けるような熱を帯びる傷口に触れた彼女の指の感覚は、清流の水のように冷たくて心地良い。

「あなたはまもなく死ぬわ。私はまたひとりぼっちになるのね」

その声の響きは少女であったが、永い年を経てもなお存在し続ける事に疲れを感じているようでもあった。

「長くはありませんが、ここにいます」

ハルシオンは右手を上げ、首に添えられた彼女の手を握りしめた。

「名前を、教えて下さい……私は、ハルシオン」

「……ハルシオン……それは、古き翡翠（かわせみ）の鳥の名ね」

彼女の声が少し明るさを増した。遠い昔を思い出すように。

「私は――グロリア。そう、呼ばれていた覚えがあります」

「グロリア……」

深い金色の瞳がゆっくりと頷く。

「――綺麗だ」

「……えっ？」

「あなたの金色の瞳。満月の光のようだ。慈愛に満ちて……優しい……」

グロリアが戸惑ったようにその瞳を見開く。

それを見つめながらハルシオンは多分自分は幻覚を見ているのだと思った。

さもなくば、夢を。

手足の感覚は鈍り傷の熱ささえも失せていく。

いつしか視界は闇に覆われようとしていた。

「ハルシオン」

おずおずと呼びかける声。

ハルシオンはただそれを――暗闇の中で耳元で呼びかける声を聞いている。

「もしも、命があれば――それが続く限り、あなたは私の傍にいてくれますか？」

——どうして、そんなことを？

もはや口を開く気力も失われた。

けれど闇の中で彼女の声が再び響いた。

「一人は寂しいから。あなたは寂しくないの？」

——私は……。

すでに死に往く身であるのに、今更一人が寂しいとか思うことすら考えつかない。

けれど一人ここに残る彼女を思うと、その寂しさを想像することはできた。

だから名前を尋ねてしまったのだ。　そうして欲しいと望まれたような気がして。

——あなたの傍にいます。私でよければ。

「ありがとうございます。ならば、これを与えます」

何かが唇に触れた。

ぼたりぼたりと岩を伝い落ちる清水のように冷たい液体が——。

その液体を飲み込むと、今まで感じたことがないほどの喉の渴きを覚えた。

——これは？

「焦らないで。ゆっくりと飲みなさい。そして——あなたにお願いがあります」

グロリアの指が母親のようにハルシオンの額に被さる前髪を梳く。

「あなたに血を与えた事で、私は再びここで眠りにつきます。決して『吸血鬼』に、私の体を渡さないで」

——あなたの、血だって？

「そして、約束して下さい。もしも、私が悪しきものとして再び目覚めた時は、あなたが——『輝ける栄光(Shining Glory)』を私の胸に突き立てて下さい」

「お願いよ、ハルシオン——私の翡翠（かわせみ）の騎士」

◇◇◇

ハルシオンは騎士団営舎の中にある寝室で目を覚ました。

ずっと何か夢を見ていた記憶があるのだが、どんな夢をみていたのかは全く覚えていない。

けれど寝台から身を起こすと吸血鬼だったノムリスや、彼に襲われたアルファージのことが脳裏によみがえってきた。

一体どれくらい眠っていた？

ハルシオンは寝台から起き出し、夜着から銀光騎士団の白い制服へと着替えた。

あまり使うことはないが、ハルシオンの寝室は執務室の隣である。

そこへ通じる扉を開くと、窓を背にした執務机の傍らにルクシエルとアナーシアが立っていた。

「ハルシオン！　駄目よ、まだ起きちゃ」

蜂蜜色の髪を一つに束ね、馬の尻尾のように揺らしながら、アナーシアが駆け寄る。

眉根を寄せて唇をきゅっと噛み締めた表情を見るだけで、普段がさつ——いや、活発な彼女がハルシオンのことを心配しているのがよくわかる。

「ご心配をおかけしました。私はどれくらい眠っていたのでしょうか？」

「教会で倒れられてから丸一日です、騎士長」

ルクシエルも両腕を組んで険しい表情でハルシオンを見つめていた。

「そうですか……ルクシエル、あなたにも迷惑をかけてすみません。取り合えず私はもう大丈夫です」

「それを判断するのは私よ」

「あ、姫」

アナーシアが予告もなしに右手をハルシオンの額へ押し付けた。

もとい、押し付けようとしてハルシオンを見上げた。　ハルシオンとアナーシアの身長差は頭一つ分以上ある。

「屈んで。手が届かないわ」

「……」

アナーシアは主君の娘である。そして将来のアルビヨンの王位継承者である。

ハルシオンはやむを得ず片膝を付いた。

アナーシアの普段剣を握る小柄な手がそっと額に押し付けられる。

「……そうね……熱はないみたい」

安堵の息を吐きながらアナーシアの青灰色の瞳が頷く。

「ご満足いただけただけでしょうか」

「待って！ 首の傷は？」

「痛みはありません。まさに吸血鬼の歯牙にかかる所で、アナーシア様が助けに来てくださったので軽傷で済みました」

ハルシオンは立ち上がった。

その際に、机の傍に立つルクシエルが静かに首を横に振るのが見えた。

「騎士長。あまり無理をしないで下さい。陛下にはあなたの負傷のことは報告済です。数日静養するように命じられました。そうですよね、アナーシア様」

「え、ええ。そうよ、ハルシオン。お母様もあなたのことをとても心配していたわ」

「ではなおの事、職務復帰のご報告を陛下にしなければ。そして私のために、城出禁止のご命令に背いた姫のお詫びも」

「ちょ、ちょっと！ どうしてそうなるのよハルシオン！！」

踵を返してハルシオンは顔をしかめた。

アナーシアがいつもの如く、ハルシオンの首の後ろで一つに束ねた白金（プラチナ）の髪をむずと掴んだのだ。

「――アナーシア様。それはやめて下さいと申し上げたはずです」

嫌々振り返ると、唇を引きつらせてアナーシアがハルシオンを少しも笑っていない瞳で睨みつける。

「だったら切りなさいよ。全く、嫉妬するほど綺麗な髪なんだから」

「え？」

「だから一、なんか、イライラするのよね。私なんか髪油つけてどんなに手入れしたって『馬の尻尾』なんだから！
そうだわハルシオン、私が切ってあげるわ」

アナーシアが腰に携帯している短剣の柄に手をかけた。

水を得た魚のように、その瞳がきらきらと輝いているのは気のせいだろうか？

流石に今のアナーシアからは身の危険を感じる。

「ちょっと……待って下さい！ ……姫！」

ハルシオンは慌てて髪を掴むアナーシアの手を振り解くと、外へ通じる扉を開けて執務室から逃げ出した。

「あ！ 何逃げるのよハルシオン！ 待ちなさい」

抜き身の短剣を手にしてアナーシアがその背中を追う。

「……」

一人部屋に残ったルクシエルは額に手を当てて盛大にため息をついた。

以前アナーシアがハルシオンのことについて語った言葉を思い出しのだ。

『ハルシオンのことを考えていたら息が止まって、目眩がするくらい胸がどきどきして、たまらなくイライラしてくるの！』

「どうやらそれは恋ではなくて、嫉妬だったようですね……」

◇◇◇

一体アナーシアが何を考えているのかがわからない。

ハルシオンは夜の闇に身を隠しながら、時折仮眠に使う庭園の東屋へ向かっていた。

歩きながらふと、自分の体がこんなにも頑丈な方だったのかと思いながら。

ルクシエルがハルシオンが教会で倒れてから一日しか経っていないと言っていたが、たった一日で熱が下がることはありえるだろう。

だが――。

ハルシオンは利き手である右手を握り締めて動かした。

確かにノムリスに右手首の骨を砕かれたのだ。

けれど今は何の痛みも感じない。重いものだって持つ事ができる。手首は腫れておらず骨折の形跡はない。

首の咬傷も制服に着替えた時、包帯を外したみた所、跡形もなく綺麗に治っていたのだ。

「私は……一体……」

ハルシオンは歩きながら肩に流れる白金（プラチナ）の髪の手を絡ませた。

ひそかに城の女性たちに憧れと羨望の眼差しで見られている――勿論ハルシオンは気にしていない――このふざけた髪だってそうだ。

元々はアルピヨン人として普通の黒髪だった。

アナーシアと同じくらいの長さだったが、『輝ける栄光』と呼ばれるあの十字架を手にしてから、白金に変わってしまった。

薄々感じてはいたが、どうやら自分は限りなく人間から離れた存在として生きているようだ。

そして、それをあの銀髪の吸血鬼――ノムリスも気付いた。

『……この血――お前は……まさか！』

ハルシオンの血に人間とは違うものを感じたのだろう。

朦朧とした意識の中でも、ノムリスが動揺していた事をはっきりと覚えている。

「やっぱり、ここにきたわね」

ハルシオンは東屋の前で足を止めた。

石造りの丸い天井を持つ東屋の入り口には、アナーシアがハルシオンを待っていたといわんばかりに立っている。

青白い月光がその小柄な体を柔らかな光で照らしていた。

ハルシオンは警戒するように足を止めた。

するとアナーシアがうなだれてゆっくりと首を左右に振った。

「私が悪かったわ、ハルシオン。もう髪を切るなんて言わないから。ごめんなさい。ただ、前からそう言ってみたかっただけなの」

「いえ――」

ハルシオンは足を前に進みかけて、再度確認するように口を開いた。

「謝ったとみせかけて、実は髪を切るなんて事、しないでしょね？」

「そ、そんなのしない、しないわよー！」

けれどアナーシアの動きはおかしい。

さっきから利き手の右手を背後に回して前に出そうとしない。

それをちらりと一瞥して、ハルシオンは諦めた。

この姫には敵わない。今逃れる事ができても、何時かその時は来る。

ハルシオンは翡翠（かわせみ）色の瞳を伏せ静かに微笑した。

「……いいですよ。アナーシア様。そのお手にされている短剣で、私の髪を切って下さい」

「えっ！ あ、いや――それは――」

思ったとおりアナーシアは右手に短剣を持って後ろ手にそれを隠していた。

この姫は自分の好奇心を抑えることがまだできない。

「どれくらいの長さがお好みですか？ いっそルクシエルみたいな髪型もいいですね。もしもご希望なら私の髪でかつらを作っても良いですよ。姫の濃い艶やかな金髪もよいですが、真っ直ぐな白金（プラチナ）もいいかもしれません。ドレスをお召しになられたら、お人形さんみたいにみえるかも」

「ハルシオン——私……、私、そんなつもりじゃ……あっ！」

ハルシオンはアナーシアの右手から短剣を取り上げると、それを首の後ろで纏めている髪紐の辺りに押し当てた。

「ハルシオン！」

鋭利な短剣の刃が、月光にも似たハルシオンの白金の髪を切り落とす。

ハルシオンはせいせいしたように首を振った。

その左手には流水のように輝く長い髪一束が握られている。

アナーシアが両手を口元に当てて、今にも泣きそうな顔でそれを見つめていた。

「そんな……」

「アナーシア様、なんという顔をされるのです。これがお望みだったのでしょうか？」

「だって、だってハルシオンの髪——綺麗だったのに……それなのに、私——」

その場から走り出そうとしたアナーシアをハルシオンは肩を掴んで引き止めた。

「嫌、ごめんなさい！ 私、部屋に帰るわ！！」

「お待ち下さい」

「本当に酷い事したって分かってる！ だから離して！」

「酷い事？ 一体、姫が何をしたというのです？」

「だって私——！」

「姫、あまり暴れないで下さい！ 髪がお手に引っかかって痛いです」

「えっ？」

ハルシオンの腕の中でもがいていたアナーシアが、驚愕に目を見開く。

「うそ……」

アナーシアはきらきらと手に絡みつく長い白金（プラチナ）の髪を見つめ、その元がどこに繋がっているのかを確かめるようにハルシオンの顔を見上げた。

「これでおわかりになりましたか？ 姫は何もなさっておられません」

ハルシオンは肩を流れ落ちる白金の髪を右手で背中側へと払いのけた。

その長さは以前と変わらず腰の所までである。

「さっき切った髪の毛は——」

アナーシアがハルシオンから体を離して後さずりする。

「こちらにまだ持ってます」

ハルシオンは髪を束ねていた紐がついたそれをアナーシアに見せた。

「これはどういうことなの？」

何がなんだか分からない。

アナーシアの顔が今にも卒倒しそうに青白くなった。

ハルシオンは切り捨てた髪一束から手を離し、アナーシアの顔を覗き込んだ。

「驚かせてすみません。アナーシア様、大丈夫ですか？」

こくりとアナーシアが頷いた。

その瞳が再び涙で潤んでいる。

やはり驚くのも無理はないだろう。

ハルシオン自身も、この髪に関しては気持ちが悪いと思っている。

「どうしてこうになってしまうのか、理由はわかりません。ただ——『輝ける栄光(Shining Glory)』を手にした時から私の髪は白金（プラチナ）と化し、切ってもこの長さまで一瞬で戻ってしまうのです」

アナーシアの青白い頬に一筋の涙が落ちた。

ふるふると唇が震えている。

アナーシアは手の甲で涙の雫を払い落とし、やおらハルシオンの腕を掴んで顔を上げた。

「――よかった。ハルシオンの髪が元に戻って――本当に、よかった」

「アナーシア様」

ハルシオンは一瞬あっけにとられた。

気持ち悪くはないのだろうか。

いや、一度切った髪が一瞬で元の長さに戻るなんて――それはもう人間ではない。化け物だ。

「アナーシア様、私はもう――」

「言わないで」

ハルシオンの口をアナーシアの右手が押さえた。

「ハルシオンはハルシオンよ。あなたはアルピオンを吸血鬼から守る騎士。それ以外の何者でもないわ」

「……」

ハルシオンは口元を押えるアナーシアの手を掴み、そっと下に降ろした。

アナーシアはハルシオンを見つめたまま、いつものちょっとおどけたような笑みを返した。

アナーシアは強い。

目を背けたくなる現実も自ら進んで受け止めようとする『強さ』を持っている。

その強さに救われた気がする。

「ありがとうございます。本当は気持ち悪がられると思ったので、髪に触れられることが気になっていたのです。でも……皆が姫のように、異質な存在である私を受け入れてくれるとは限りません」

「いいえ、そんなことないわハルシオン。皆は忘れてはいない。三年前、あなたに助けてもらった事を。あなたは『輝ける栄光(Shining Glory)』に選ばれた騎士。この髪はその代償――だって、とても綺麗だわ」

アナーシアの手がハルシオンの髪に触れる。

いつものようにぞんざいに掴むのではなく、神聖なものに触れるようにそっと指先を滑らせる。

「『輝ける栄光(Shining Glory)』の光がここに宿っているみたい。私、ハルシオンの髪がとても好きなの。だからさっきあなたが髪を切り落とした時は、あまりにも悲しくて心臓が止まる思いだったわ」

ハルシオンは苦笑した。

確かに。あの時のアナーシアの顔は悲壮感に満ち満ちていた。

「その髪が吸血鬼避けになれば私は無敵なんです。実際、そうではなかったですから」

「ハルシオン。あの吸血鬼――あれは、私が出会った銀髪の神官だったわね」

「ええ」

ハルシオンは言葉少なげに返事をした。

「逃がしてしまったわね」

「ええ」

「――ハルシオン、また彼はあなたの所に来るんでしょ。あなたはそれを知っている」

ハルシオンは黙ったままアナーシアを見つめた。

アルピオン王家の女性のみを表れるという『先見の力』――。

「視（み）えていらっしゃるのですか？」

「そうよ。私はハルシオンのことならわかるの！ だからあなたが教会から帰ってこなかったあの日も嫌な予感がしてたまらなかった」

「……」

ハルシオンは俯いた。

アナーシアがルクシエル達と共に駆けつけてくれなかったら、今頃自分はノムリスの傀儡となって、ひょっとしたら三年前に現れた吸血鬼達のように、アルピオンの住人を襲う存在になっていたかもしれないのだ。

いや。

今後、そうなるかもしれない。

「アナーシア様、お願いがあります」

ハルシオンの静かな声にアナーシアが眉をひそめた。

「ちょ、ちょっと待って！」

アナーシアが全身で待ったをかけた。

「思い出したわ。いろんなことがありすぎて忘れてたけど。ハルシオン、あなた、教会から帰ってきたら、私の『お願い』をきいてくれるっていう約束、覚えてる？」

忘れてるという答えは認めない。

ハルシオンはアナーシアの瞳の中にその感情を目ざとく読み取った。

詳しくは覚えていないが、そんな約束をしたような気はする。

「そういえば、そんなこと……していたような気はします」

「気がする、じゃなくてしたの！ だから、先に私の『お願い』を言ってもいい？」

「ええ。それは構いませんが」

ハルシオンは頷いた。元よりアナーシアに逆らう気はない。

「ええと……改めて言うとなると、ちょっと恥ずかしいわね」

アナーシアは頬を紅く染めて、照れたように鼻の頭を小指で搔いた。

「お願いっていっても、無理難題じゃないから安心して。私に射撃を教えてほしいの。ほら、剣術だと今回のように離れた敵と戦うには不利じゃない。だから私も銃を扱えるようになりたいの！」

「……」

何がこの少女を吸血鬼と戦うことに駆り立てているのだろうか。

人々を一一いや、目の前の少女を吸血鬼から守る為に、自分は銀光騎士団を束ねて日々警護に当たってきたのではないのか。

「いいでしょ、ハルシオン。銃が扱えれば私だって自分の身は自分で守れるわ」

ハルシオンは翡翠色の瞳を伏せた。

口の中に苦い物が広がっていく。

彼女の願いをかなえれば、自分の願いもかなうということに気付いたからだった。

やはりアナーシアには『先見の力』がある。

「そうですね。姫なら銃も剣と同じように扱えると思います」

「うわ、やったわ。ありがとう、ハルシオン」

「ただし、それにはアナーシア様が、私の『願い』をおききになって下さることが条件です」

ハルシオンはゆっくりと、噛み締めるように言葉を吐いた。

喜色に輝いていたアナーシアの瞳が不安げに瞬く。

「それは一一内容にもよるわ」

「どうか、おきき届けて下さいますよう、たっお願い申し上げます」

ハルシオンは頭を下げた。白金の長い髪が肩からさらりと滑り、月光の光を反射して水面のように輝く。

「……交換条件っていうのね」

「そうです」

ハルシオンの態度の変化にアナーシアが声を震わせる。

「わかったわ。じゃ、ハルシオンの『お願い』っていうのは、何？」

「はい……」

ハルシオンは乾いてきた唇を舌で湿らせた。

「――実は、姫が教会にかけつけてくださったあの時。私はノムリスに彼の傀儡となる吸血鬼にされる所でした。今回は姫のお陰で事なきを得ることができましたが、彼は今まで私が出会ったことがない『真正』の吸血鬼だったのです。ですから――」

ハルシオンは急に吹いた夜風に舞う白金の髪を押えながらアナーシアに告げた。

「私が彼の傀儡になった場合は、必ず殺して下さい。それが、私の願いです」

「……」

ハルシオンは何も言わないアナーシアの手を取った。

夜気のせいだろうか。すっかり冷え切って冷たくなっている。

剣を握る勇ましい姫だが、その手はハルシオンの掌にすっぽり収まってしまうほど小さくて細い。

僅かに震えているその手をハルシオンは自らの左胸に載せた。

「ここに銀の弾丸を三発撃ち込めば終わりです。方法は、私が教えます」

「――違う」

アナーシアがハルシオンの手から自らそれを振り払う。後ずさり、叫ぶ。

「違う！ 違う！！ そんなつもりで、私は射撃を覚えるんじゃない！」

両手をきつく握りしめてアナーシアは激しく頭を振った。

「皆を守る為に覚えるの！ ハルシオンを殺すなんて……そんなこと、できるわけじゃない！」

「ならば、射撃を教えるという話はなかったことに」

「ハルシオン！」

ハルシオンは瞳を細め毅然とした態度で口を開いた。

「私は毎夜、吸血鬼にされた元人間であるアルビヨンの民をこの手で殺しています。その中の一人が私だったとしても、なんら変わりありません。いや、それができる覚悟のない方に、吸血鬼の殺し方を教える事はできません」

「……」

アナーシアは青灰色の瞳を見開き、唇を噛み締めながら立っていた。

まだ十七才の少女にこんな酷なことを言わなければならない――それが自分の弱さ故だということをハルシオンは自覚している。

「わかったわ」

乾いた声でアナーシアが答えた。

その瞳は弾丸のようにハルシオンに向かって真っ直ぐ見上げられている。

「私は――その可能性を回避するためにあらゆる努力を惜しまない。でも……そんな運命から逃れられない時は、アルビヨンの姫として、あなたをこの手で殺します」

ハルシオンはアナーシアに頭を垂れた。

「ありがとうございます」

その時、ふっと首に彼女の細い腕が回されるのを感じた。

小さな唇から漏れる微かな息と、頬と頬が僅かに触れ合う体温も一一。

「でもね、ハルシオン。私が銃を握る決意をしたのは、あなたを失いたくないから。あなたを殺すためじゃない。その我侷だけは許してくれる？」

「……はい」

ハルシオンは静かに頷いた。

「ありがとう。これで私も覚悟を決めることができたわ」

ハルシオンの首に回していた腕を解き、アナーシアは頭上で結い上げた蜂蜜色の髪を揺らして微笑んだ。

「じゃ、早速明日から、射撃を教えてね。ハルシオン」

「わかりました。姫に合う銃をご用意して、演習場でお待ちしています。時間は午後からでよろしいですね」

ハルシオンは夜空を見上げた。

白く輝く月が頭上高く昇っているのが見える。

「夜も更けました。部屋までお送りします」

「あ——っ！！」

アナーシアの背に手を置こうとしたときだった。急に彼女が慌てたように叫び声を上げた。

「一体、どうされたのですか？」

あまりにも唐突だったのでハルシオンはぎよっとなった。

「だめよ。私、明日演習所へ行けないわ。城出禁止のお母様のご命令に背いてしまったから、一週間自室での謹慎を言い渡されてしまったの」

ハルシオンは顔をしかめた。

その件に関しては、明日の朝、女王陛下に謁見を賜り、報告をしなければならないだろう。

彼女はハルシオンのために、母親の命令に背いてしまったのだから。

そう考えてハルシオンははたと我に返った。

「アナーシア様」

「何？」

「今あなたは一週間の自室謹慎でいらっしゃるんですよね？」

「そうよ。ハルシオンのせいだからね」

いーっと歯を見せてアナーシアが怒る。

それを冷静に見下ろしながらハルシオンは呟いた。

「いいんですか？ 今、こうして部屋の外に出ています？」

アナーシアがふふんと鼻歌まじりに声を上げ、ハルシオンを見上げた。

「ちょろいもんよ。夜ならエルムに身代わりしてもらって、寝台の中に入っててもらってるから。実はハルシオンを助けに行く時もそうしてもらったんだけど、ルクシエルと一緒に城門から戻ってしまったから、衛兵が私のこと、お母様に報告しちゃってばれちゃったの」

「……」

ハルシオンは内心呆れた。

第一エルムもエルムだ。

一度ばれてしまったのに、アナーシアに逆らう事ができないからと、また同じことをするなんて。

だがきっと彼女の母であるアルビヨン女王はすべてを知っているのだ。

彼女もまた『先見の力』を持つ偉大な存在である。

「アナーシア様、どうか、無断で部屋を開けるのは今夜限りにしてください。たった一週間の辛抱です。でないと、あなたに射撃を教えるのも良いという許可を、陛下が下さらないかもしれませんからね」

「そ、それは困るわ！」

蜂蜜色の髪を馬の尻尾のように跳ねさせて、アナーシアが顔を青白くする。

「じゃ、戻りましょうか」

「ええ」

ハルシオンは自らアナーシアへ手を差し出した。

この姫は多分アルビヨンの希望となる――。

彼女を守ることは、アルビオンを守ることと同じ。

そして、黄金の瞳を持つ彼女との約束を守り続けることにもなるだろう。

記憶は断片的でよく思い出せないが、『約束』だけは守らなくてはならない。

それが、『輝ける栄光(Shining Glory)』を手にした代償なのだ。

Shining Glory

<http://p.booklog.jp/book/71777>

著者：天竜風雅

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tenryu-dou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71777>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71777>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ